

Docon Regional Research

[ドーコン リージョナル・リサーチ]

北海道の観光

自然・都市の観光利用と保全

| 特集1 | 国立公園の利用と保全 基調レポート

柳川 久 (帯広畜産大学 名誉教授)

| 特集2 | 歴史ある都市の観光 基調レポート

三宅理一 (東京理科大学 客員教授)

| 特集3 | 自然と共生する社会 基調レポート

柳川 久 (帯広畜産大学 名誉教授)



北海道の未来を、どう歩むのか。 ヒントは、「人」と「地域」に眠っている。

人口減少と少子高齢化の加速、都市部への人口集中と地方の衰退、出遅れが目立つグローバル競争、待ったなしの地球環境問題。まさに混迷の時代に日本が抱える課題は、北海道の課題そのものであり、これまでの社会経済活動の方向性を根本的に変える、新たな取り組みが求められている。見方を変えてみれば、今はまさに、高付加価値化や知識集約型産業の拡大によるイノベーション創出の絶好の機会でもある。国土の5分の1以上という広大な大地、豊富な自然資本を有する北海道は、地域独自の新たな方向と戦略を自分達の手で生み出し、知識と創造性を核とした経済活性化を図る可能性を大いに秘めている。

本レポートは毎号テーマ別に、「世界水準の価値創出」や「持続可能な地域の活動・産業」の動きについて、学識者や有識者と共に道内各地で現地取材し、その活動が育まれた歴史や背景、課題とその克服方法などを事例として調査報告する。持続可能な地域社会、産業の発展、自然環境の保全や生活の質の豊かさ向上など、複雑化しながら存在する課題の解決に向けて、皆さんと共に考えていければ幸いである。

北海道にとって、最大の財産となる観光資源は圧倒的スケールの自然環境である。山岳や原生林、湿原などを内包する自然公園が、北海道の12%以上を占め、直近では国内で35か所目の国立公園「日高山脈襟裳十勝国立公園」が新たに指定。貴重な自然環境の保全活動と観光利用という課題への対応が求められている。

また、保全と利活用の両論が課題となるもう一つの観光資源が、北海道各地の歴史を伝える建築遺産や街並みの数々である。失われてしまえば二度と戻らない、貴重な建築をどう残していくのか。さらには、近年社会問題となつているアーバンベアやエゾシカなどの野生動物と人間の社会生活との間で生じている軋轢。いずれも、ともすれば相容れない、バランスを取る事が難しい課題である。

本号では、自然や野生動物、歴史的建造物の保護・保全と、人の社会生活や観光利用などの経済活動で生じる、相反する課題解決に向き合う道内各地の取り組みを取材した。

ご寄稿頂いた有識者の基調レポートとともに思索してみたいと思う。



撮影/塩原 真

Docon Regional Research

Docon Regional Research ドーコンリージョナル・リサーチ vol.03

北海道の観光

自然・都市の観光利用と保全

特集1 国立公園の利用と保全基調レポート

日高山脈の国立公園化で問われる課題

— 原生の貴重な自然を維持・保全するために —

柳川 久 帯広畜産大学 名誉教授

10 特集1 国立公園の利用と保全事例紹介①

大雪山国立公園管理事務所 上川町

11 特集1 国立公園の利用と保全事例紹介②

支笏洞爺国立公園管理事務所 千歳市

12 特集1 国立公園の利用と保全事例紹介③

新ひだか自然保護官事務所 新ひだか町

15 特集1 国立公園の利用と保全事例紹介④

北海道日高振興局 浦河町

16 特集2 歴史ある都市の観光基調レポート

函館—その隠された歴史と遺産の数々

三宅理一 東京理科大学 客員教授

22 特集2 歴史ある都市の観光事例紹介①

北海道中央バス株式会社 小樽市

24 特集3 自然と共生する社会 基調レポート

野生動物と共生する社会を目指して

柳川 久 帯広畜産大学 名誉教授

30 特集3 自然と共生する社会 事例紹介①

北海道環境生活部
自然環境局野生動物対策課ヒグマ対策室 札幌市

33 特集3 自然と共生する社会 事例紹介②

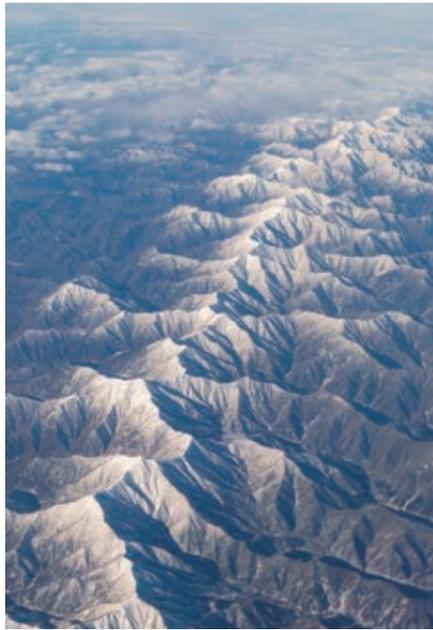
北海道猟友会札幌支部 札幌市



撮影/広沢 圭司



日高山脈の国立公園化で問われる課題



北海道の背骨といわれる雄大な日高山脈の山並み。(写真提供/ピクスタ)

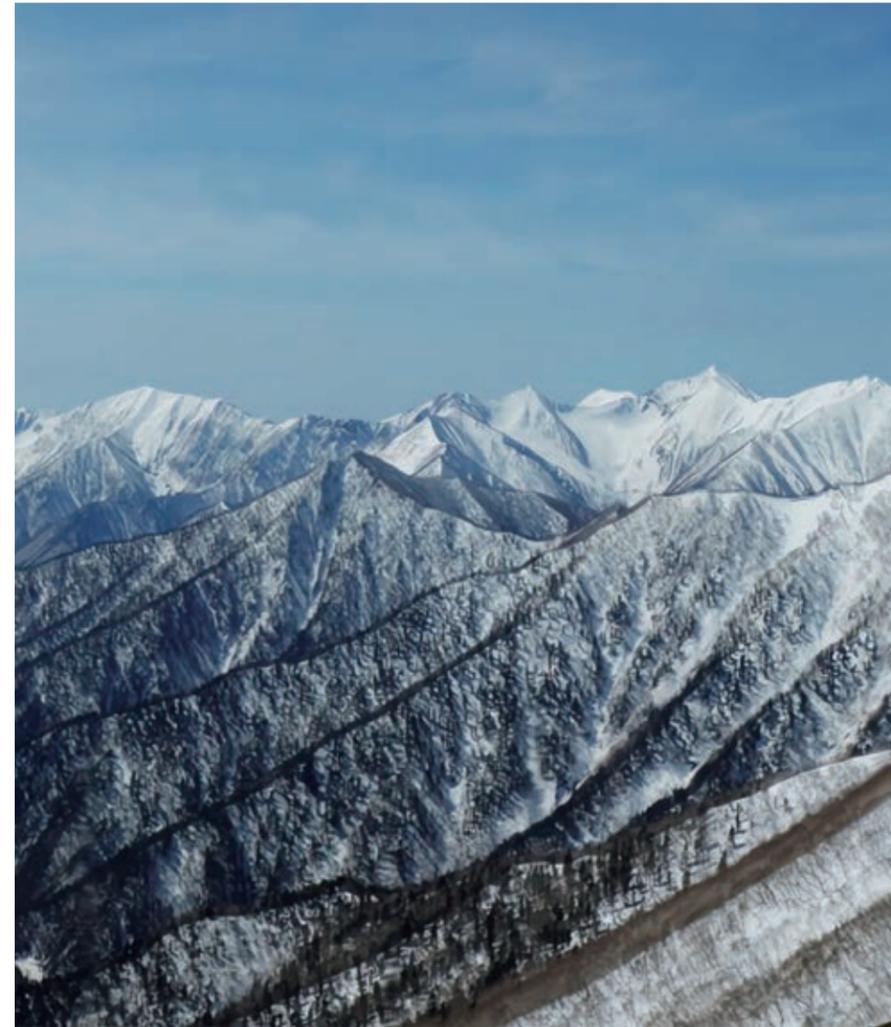
しているのだが、道内出身者でさえその成り立ちを知らない学生が多いことに驚かされた。ちなみに授業で「北海道十勝に来て自然に関する事で感動したことは何か」という問いを受講生にしているのだが、その第一位は大学のキャンパス内にエゾリスがいる事であった。第二位が「日高山並みの麓まで見通せること」であった。晴天の多い十勝で、毎朝通勤のたびに見ることでできる日高の山々は、私がこの地で暮らすことになって感じるささやかな至福の時の一つである。

その日高山脈がこの度「日高山脈襟裳十勝」という名称で国立公園化することとなった。当初は2021年度末に国立公園の指定を目指していたが、予定が後ろにずれ込み、2024年5月22日の環境省の諮問機関・中央環境審議会の自然環境部会で指定することが決定。同年6月25日に正式に指定され、国内最大の国立公園が誕生した。

日高山脈のあらまし

最終的には多数決という異例の手段で決定した。これらの問題は完全に解消されたわけではなく、今後、国立公園化が決定したのちの公園管理・利用にも関係してくるであろう。

日高山脈は火山活動によって形成された大雪の山々として、大規模な地殻の変動によって出来上がった山脈である。約1300万年前に北海道の中央部で二つの巨大プレートであるユーラシアプレート(日高側)と北米プレート(十勝側)が衝突して出来たものである。西側と東側のプレートがそれぞれめくれ上がり、東側のプレートが西側の上面に覆いかぶさって日高山脈となった。日高側のアポイ岳周辺には広大な面積でかんらん岩の露出が見られ、「幌満かんらん岩体」と呼ばれ、世界的にも貴重な地質である。日高山脈は北海道唯一の「山脈」で、山脈の定義は例えば「平地の間に挟まれる、細長く連続的に伸びる山地」であり、「特に顕著な脈状をなす山地をいう」とある。最



日高山脈を構成する山岳の一つ「十勝幌尻岳」山頂からの風景。(写真提供/中札内村観光協会)

特集1 国立公園の利用と保全 基調レポート 日高山脈の国立公園化で問われる課題 — 原生の貴重な自然を維持・保全するために —



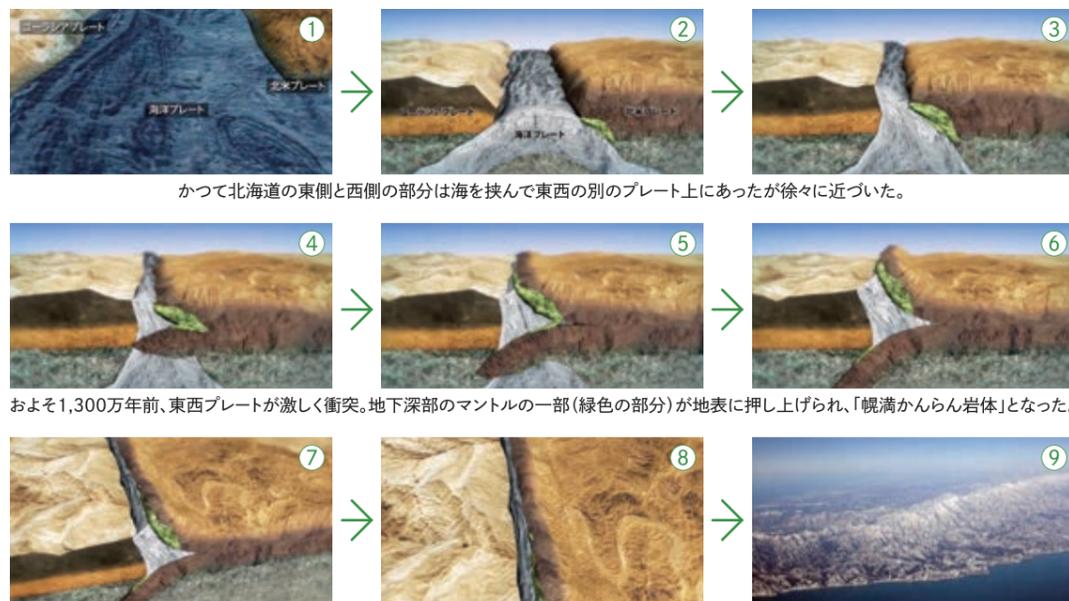
柳川 久
帯広畜産大学
名誉教授

やながわ・ひさし/野生鳥獣の生態や保護管理に関する教育・研究のほか帯広畜産大学理事・副学長として大学の運営に携わる。他に帯広市教育委員、北海道開発局や北海道、十勝管内市町村の各種委員など幅広く活動。『野生動物のロードキル』『北の大地に輝く命』(いずれも東京大学出版会)など著書・論文多数。

国内35カ所目の国立公園として指定された「日高山脈襟裳十勝国立公園」。桁外れに広大な原生の自然環境に希少種の動物・昆虫が生息し、固有種の高山植物も数多い。貴重かつ脆弱な自然の保全と、観光による地域振興の両立に、私達はいかに向き合うべきなのか。野生動物管理学を専門とする柳川久教授にご寄稿頂いた。

日高山脈は思い出の地である。卒業研究でほぼその中央部に位置するベテガリ岳に登山し、麓の造林小屋で50日以上を過ごして動物の調査を行った。今から45年も昔のことである。その当時、全道のヒグマの個体数は2000、3000頭と推定され、エゾシカも平地では珍しい動物だった。その大型の獣に日高の調査では毎日のように遭遇する。ある晩、コウモリの調査のためかすみ網を張って、座って待機していたら、すぐ後ろでフツという鼻息が聞こえ、大きな動物(クマ)がゆっくりと遠ざかってゆく気配が

した。それ以降恐怖で夜の調査ができなくなった。とにかく大型のクマ・シカから、小型のネズミ類に至るまで日高はその質も量も桁違いに多い場所だった。私の勤務する帯広畜産大学は一学年250人の小さな大学であるが、学生の6割5分から7割が本州以南からやって来る。そこで1年生の学生を対象に北海道や十勝地方の「イロハ」を知ってもらうための「十勝学」という授業を開講して、十勝の歴史・産業や自然に関する講義を行っている。講義の中で東大雪や日高山脈の成り立ちを簡単に紹介



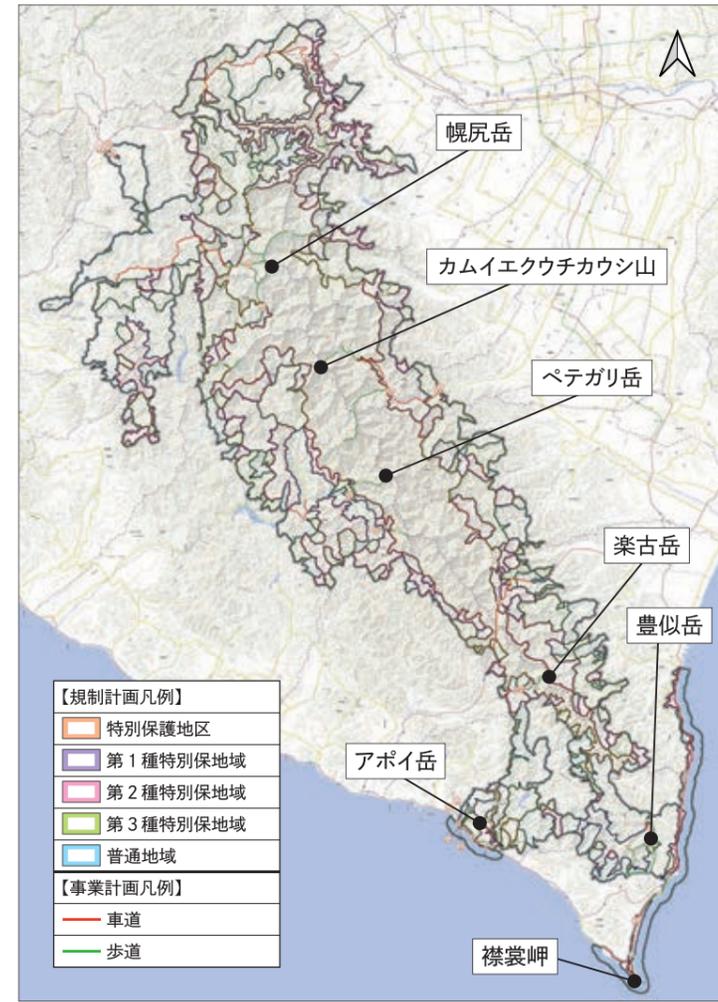
かつて北海道の東側と西側の部分は海を挟んで東西の別のプレート上にあったが徐々に近づいた。

およそ1,300万年前、東西プレートが激しく衝突。地下深部のマントルの一部(緑色の部分)が地表に押し上げられ、「幌満かんらん岩体」となった。

東側のプレートの先端がめくれ上がるように西側に乗り上げたことで、日高山脈の原型が出来たといわれている。

アポイ岳ジオパークビジターセンターでは「日高山脈の成り立ち」などをパネルやジオラマなどで分かりやすく展示している。(資料提供/様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会)

日高山脈の国立公園化で問われる課題



日高山脈襟裳十勝国立公園 区域図及び公園計画図(全体図)
 ※凡例及び主要な名称を加筆・加工
 出典:環境省ホームページ(https://www.env.go.jp/park/hidaka/intro/index.html)

公園区域

245,668ha(陸域)
6,510ha(海域)
国有地 213,256ha
公有地 27,745ha
私有地等 4,667ha

※国立公園の約2倍
 (国立公園面積:109,555ha)
 ※我が国の陸域最大
 (第2位:大雪山国立公園 226,764ha)

保護規制計画

	国立公園	国定公園
特別保護地区	73,743ha	19,496ha
第1種特別地域	30,329ha	51,413ha
第2種特別地域	35,102ha	18,387ha
第3種特別地域	55,101ha	13,733ha
普通地域(陸域)	51,392ha	418ha
普通地域(海域)	6,510ha	6,108ha
合計(陸域のみ)	245,668ha	103,447ha

日高山脈襟裳十勝国立公園区域及び保護規制計画
 参考資料:中央環境審議会自然環境部会(第49回)
 出典:環境省ホームページ(https://www.env.go.jp/council/12nature/49_1.html)

新たな「日高山脈襟裳十勝国立公園」は、日高山脈一帯、アポイ岳周辺、豊似湖周辺、襟裳岬やその周辺海域で陸域面積24万5668ha、海域6510haに及ぶ一帯が指定され、日本最大の国立公園となる。特に特別保護地区と第一種特別地区がそれぞれ7万3743ha、3万329haと、これも最大級で原生の自然が広範囲で残る国立公園である。

活用と保護との両立

新たな「日高山脈襟裳十勝国立公園」は、日高山脈一帯、アポイ岳周辺、豊似湖周辺、襟裳岬やその周辺海域で陸域面積24万5668ha、海域6510haに及ぶ一帯が指定され、日本最大の国立公園となる。特に特別保護地区と第一種特別地区がそれぞれ7万3743ha、3万329haと、これも最大級で原生の自然が広範囲で残る国立公園である。

(林野庁の国有林・北海道有林)で、自然環境保全に適しているばかりでなく、⑤農業・畜産業・林業・地下資源の開発や道路建設など、各種の開発による自然破壊の恐れが少なく、⑥主要な山岳や溪流は、登山などアウトドア活動や野外自然教育の利用に供されている、である。

一方、国では、平成13(2001)年12月に環境大臣より中央環境審議会に対し、「自然公園の今後のあり方について」が諮問され、自然環境部会自然公園のあり方検討小委員会や自然公園のあり方検討懇談会などの検討が進み、環境省は2007年度より国立・国定公園総点検事業を開始。2010年には、自然環境の質と国立・国定公園の指定状況とのギャップ分析の結果を踏まえて、今後、新規指

定または公園区域の大規模な拡張を行うべき候補地を公表。国立公園の新規指定などの候補地に日高山脈を選定し、2016年から2018年にかけて国立公園指定検討調査が実施された。2020年2月には国立公園指定の基本方針が策定されるなど自然公園に関する動きが活発化する中、十勝管内の関係6市町村(清水町、芽室町、帯広市、中札

内村、大樹町、広尾町)では「日高山脈国立公園化推進事業実行委員会」を設置し、国立公園化の機運を高めるために2020年から「国立公園化応援!フォトラリー(インスタグラム)」「レンジャーさんから日高山脈を教わろう!キッズプログラム」などの行事を開催。

日高管内でも日高振興局を中心に、関係する7町(日高町、平取町、新冠町、浦河町、様似町、えりも町、新ひだか町)と連携して「日高山脈襟裳国定公園フォトキャンペーン(インスタグラム)」や有識者、学識者の講演やシンポジウムの開催など機運醸成に取り組んできた。2022年6月には、中央環境審議会自然環境部会委員による現地視察が行われ、環境省は2023年6月に2024年中の国立公園指定を発表。地元との調整や国立公園としての名称などの議論を経て、2024年6月25日に正式に指定され、国内最大の国立公園の誕生に至った。



7月下旬頃から見ることができる「エゾシオガマ」を始め、多くの希少種が生殖している。(写真提供/谷水 亨)

北部のかんらん岩・蛇紋岩からなる超塩基性岩の岩塊地にはユキバヒゴタイ、カトウハコベなどその地質に適応し、そこで見られない超塩基性岩植物の群落が見られる。山

脈南西部のアポイ岳ではアポイワガタ、アポイカンバナなどの固有な植物が多数見られる(アポイ岳固有種5種、固有変種8種、固有品種4種)。アポイ岳は標高が低く(810m)、小さな山塊にも関わらず、高山植物や超塩基性植物が生育してきた。ただ、後でも少し触れるが地球温暖化の影響と見られる植生の変化がアポイ岳でも見られている。

陸棲の脊椎動物には植物のような固有種はいないが、ヒダカゲンゲ、ヒダカミヤマノエンドウなど固有の植物やミヤマシオガマなどの希少種が多く、9種類の固有種、7種類の固有亜種が記録されている。

これらの特殊な地形、景観希少で貴重な生物を有する日高山脈であるので、1981年に日高・十勝管内1市(帯広市)11町(新ひだか町ほか)1村(中札内村)にまたがる「日高山脈襟裳国定公園」が指定された。総面積は日本の国定公園の中で最も広く、10万3447haである。国定公園は、南北約150kmの日高山脈の主稜線、広尾町から襟裳岬にかけての海岸線、アポイ岳とその周辺の3地区で構成され、その特異な成り立ちと、山岳から海岸までの多様な自然環

北の狩勝峠側のサホロ岳(標高1059・5m)から襟裳岬まで南北に150kmの連なりを持ち、主稜線は概ね1500~2000mであるが、2000mを超えるのは最高峰の幌尻岳(2052・8m)のみである。「1967」や「1839」(実際は標高1842m)など標高がそのまま山の呼び名になっている峰もある。また、ナイフリッジと呼ばれる鋭く切れ込んだ稜線や日本では数少ない氷河地形で

あるカール(圏谷)やモレーン(氷河堆積堤)を見ることができ。カールは約1000カ所が東斜面と北斜面にあるため、主に十勝側からこれらを眺望することが出来る。日高山脈では標高の低い場所のエゾマツ、ダケカンバなどの針広混交林から標高が上がるにつれてダケカンバ林、ハイマツ林、高山植物群落へと植生の垂直分布が見られる。高山植生では「ヒダカ」の名を冠したヒダカミネヤナギ、

ヒダカゲンゲ、ヒダカミヤマノエンドウなど固有の植物やミヤマシオガマなどの希少種が多く、9種類の固有種、7種類の固有亜種が記録されている。北部のかんらん岩・蛇紋岩からなる超塩基性岩の岩塊地にはユキバヒゴタイ、カトウハコベなどその地質に適応し、そこで見られない超塩基性岩植物の群落が見られる。山

イ岳周辺にのみ生息する希少種であり、環境省レッドリストで絶滅危惧IA類に指定されている。また甲虫類ではヒダカメクラチビゴミムシなどチビゴミムシ類などの固有種が多く、昆虫全体として9目71科440種が記録されている。その他の無脊椎動物としては陸棲貝類(カタツムリ)のアポイマイマイが固有種である。(環境省ホームページ: https://www.env.go.jp/content/90049385.pdf)

その後、当時の社団法人北海道自然保護協会では、2006年1月30日に「日高山脈と夕張山地を新たな国立公園に指定することの要望書」を当時の環境大臣、北海道知事、林野庁長官に提出している。要望書に挙げられた主な理由は、①日本には類例のない特異な地史を持つ構造山地で、水河地形や蛇紋岩メランジュ帯を含み、②固有種に富む高山植物群落や亜寒帯性森林が発達し、野生動物の生息環境としても優れ、③原始性が豊かで日本最大の原生流域を包含するなど、わが国の風景を代表するとともに、世界的にも誇りえる傑出した風景地である、また④想定される公園区域のほぼ全域が国・公有地

日高山脈の国立公園化で問われる課題



エンルム岬の展望台からは天気良ければアポイ岳、遠くは日高山脈を一望することができる。

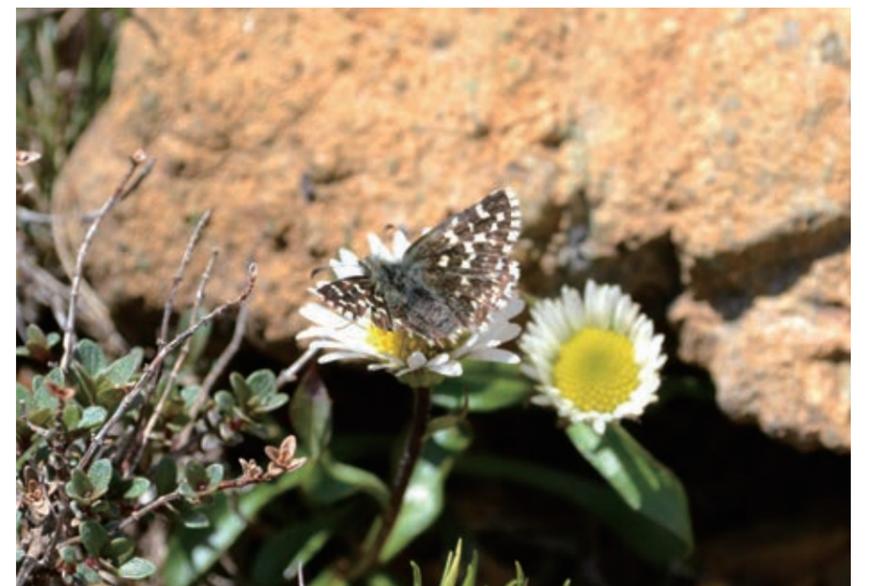
保護規制計画としては、日高山脈の主稜線一帯、アポイ岳の高山植物群落地域及び幌満ゴウウマツ自生地等、高山植生、針葉樹林、広葉樹林又は針広混交林で原生的な状態を保持している地域を特別保護地区に指定し、本公園の核心部として、厳重な保護を図るとしている。利用施設計画は、登山や山麓部の自然探勝、車道等からなる山岳・海岸景観等の展望利用を主な利用形態とし、利用施設の配置及び整備については、既存の施設を中心とした、園地、宿舎、避難小屋、野営場、スキー場、車道、歩道など必要最小限の計画としている。

利用の観点から見ると、日高山脈はとにかく山深く、険しく、登山などで入山するのは難易度が高い。従って、危険を冒さないうえこの国立公園に親しもうとするならば、遠方からの眺望を楽しむ、ビクターセンターや園地などで学び、遊ぶ、登山でもしっかりとルールを守り、熟練者やガイドと相談し、技量にあったルートに登るなど日高山脈の自然環境に適した活動を行うことが必要となるだろう。そのためには、地域での拠点整備、ガイドの育成などは当然であるが、大雪山で取り組まれていた「大雪山グレードマップ」による難易度の整理、情報発信も参考になるかもしれない。

最近では、国立公園化を記念して、帯広空港発着で日高山脈の十勝側、日高側、広尾などの襟裳岬方面やさらに釧路空港上空までをコースにした小型機による特別遊覧飛行が実施されている。これなどは普段ではじっくり見る事が出来ない景色を楽しむことが出来るだろう。

この企画が定期的なものになるかどうかはわからないが、国立公園化によって周辺自治体の観光振興が進み、地域の活性化にもなるような取り組みが必要となる。

保護に目を向けると、保護規制計画に基づき、利用者へのルールの指導、パトロールや希少植物の保護、増殖や絶滅リスクを回避するための「生息域外保全」活動や動植物に関するモニタリングなど、日高山脈の貴重な環境を未来に引き継ぐため、今まで以上に着実に実施していくことが求められる。



ヒメチャマダラセセリの生息地は、アポイ岳高山植物帯として特別天然記念物に指定されている。(写真提供/谷水 亨)

もってわかっていづつもありである。アポイ岳の高山植物群は現在も、そしてこれからの観光の目玉となる資源であることは間違いなく、近年地球温暖化の影響と思われる変化がこの高山植物群落に現れている。アポイ岳はかつて茶色い山と言われていたが、今は山頂付近までハイマツ帯が広がって緑の山に見えるそうだ。アポイ岳は低山であるが、海に近いために夏に発生する海霧が日光を遮って気温を低下させるため2000m級の高山と同じような冷涼で湿潤な環境が現れ、ヒダカソウなどの80種以上の貴重な植物を育ててきたが、温暖化の影響で雪解け時期が早まり、土壌の乾燥化が進んでハイマツが山頂付近まで進出し、周辺の高山植物の生育を妨げていると考えられている。植生に変化があるとそれを食べる動物にも変化が訪れる。国内ではアポイ岳周辺のみ生息するヒメチャマダラセセリは高山植物のキンロバイの葉に産卵するが、ハイマツの増加で産卵に適した場所を失いつつある。これらは人間の利用による直

接の変化ではないが、国立公園の指定後、観光客の増加による踏圧害などが懸念されており、この変化に拍車がかかる可能性がある。今後観光の目玉となるこの貴重な高山植物を利用しつつ、どう維持・保全していくかはここからの国立公園の大きな課題である。幸いなことにアポイ岳では「アポイ岳ジオパークガイドの会」や「アポイ岳ファンクラブ」などの地元の方たちの活動によって、その活動が支えられている。ただこれはどの場所、どの立場でも望めることではないだろうし、本場に「自然環境の保護と利活用の両立」を目指すのであれば、ボランティアだけに頼ることのない人材の育成や金銭的なバックアップなどをしっかりと構築していく必要があるだろう。

そのような中、十勝側からは今後、十勝川水系を中心とした自然再生事業が始まる予定である。この事業などは日高山脈の国立公園化と連動して、保全利活用の両面から人材育成も含めて協働することが可能かもしれない。



「いずれ山に植え戻す前提で、過酷な環境で育つかの見極めや、生息域外保全の役割のため、貴重な高山植物の株を増やす取り組みをしています。」と語る、アポイ岳ジオパークビジターセンター学芸員・水永さん。

特集1 国立公園の利用と保全

事例紹介 01

自然の大切さを伝えるため 守るだけではない視点を 大雪山国立公園管理事務所

国立公園の未来のために
官民連携で課題を解決

— 自然環境の保全と観光利用のバランスは、どのように考えていますか？

大雪山国立公園の利用を考
える時、やはり地域の活性化
に寄与する観光の要素は外せ

ません。環境省が主体となっ
て地域の観光施策を打ち出す
ということではないですが、
持続的な保全という面でも、
観光的な視点は持たなければ
いけないと思っています。

ここ、大雪山国立公園は、
陸域の国立公園として国内最
大級であり、山岳地域と山麓

地域で利用形態の違いがあり
ます。本格的な登山から温泉
保養や景勝地周辺の散策の他、
麗を流れる石狩川では民間事
業者がラフティングをやって
いるなど様々です。このため、
そういう多様な利用について
どう対応していくのかを考え
なければなりません。

大雪山の場合は、まだオー
バーユースという状況ではな
いと思います。一般論ですが、
利用だけを重視してしまうと、
何百台も収容可能な駐車場な
ど過剰な整備が必要になりま
す。また人がたくさんいるこ
とにより、自然を楽しめなく
なる場合もあるでしょう。だ
から国立公園の現場ごとにど
ういう対策をとり、どう改善
するのか考えないといけない。

大雪山でも、混雑抑制、排
気ガスからの自然環境保護、
幅員減少による交通事故防止

を目的に、紅葉シーズンには
大雪山高原温泉沼周辺でマイ
カー規制を行っています。た
だどこまで制限すればいいか
という数値を出すのが、なか
なか難しい。自然を守りなが
ら利用の環境も守る。そこは
もう、利用にも保全にも配慮
しながらという言い方しかで
きないですね。

大雪山国立公園を持続的に
利用し保全管理するための課
題などあれば教えてください。

登山道の補修などに関する
お金、働いてくれる人材、ま

た積雪による活動期間の制限
という課題は常にあります。
あとはそれらを束ねて回す仕
組みですね。この連絡協議会
が一つの仕組みではあるのだ
が、例えば知床財団のような
一元管理的な組織が必要じゃ
ないかということも、関係者
から意見としては出てきてい
ます。行政の所管にとらわれ
ずに、もっと戦略的・機動的
に活動できる組織という考え
方があっても良いと思います。

環境省 大雪山国立公園管理事務所
前所長(2023年7月時点)
広野 行男



柱状節理の峡谷に囲まれた層雲峡温泉。絶景の観賞や温泉目
当ての観光客に黒岳の登山客など、国籍も年齢層も様々な人々
が訪れる。(写真提供/層雲峡観光協会)



大雪山の主峰であり、道内最高峰の旭
岳。ロープウェイ姿
見駅から山頂まで、
約2.5時間のコース
が整備されている。
(写真提供/旭岳
ロープウェイ)

特集1 国立公園の利用と保全

事例紹介 02

道内で最も多く利用者が訪れる国立公園で、 適正利用を目指しローカルルールを策定 支笏洞爺国立公園管理事務所

近隣住民の生活を守りつつ
観光資源との共存を図る

— 支笏湖と洞爺湖という道内
でも屈指の観光地を有する国
立公園ですが、管理上の特徴と
留意点を教えてください。

北海道の国立公園は概ね林
野庁所管の国有林であること
が多く、支笏洞爺国立公園の

中でも、支笏湖のエリアはほ
とんどが国有林です。一方、
洞爺湖のエリアになると国立
公園の中で人が生活している
場所が結構あり、民有地が多
くなっています。

日本の国立公園の特徴であ
る、地域制公園というのは、
土地の財産権があって、そこ
を活用する権利が土地所有者
の方にあり、それを全部排除
してしまうことはできないため、
日本の自然公園制度では、並
列させるという事をしていま
す。そうすると、例えば家を建
ててもいいです、工場を建て
てもいいですけど、こういった
位置にこういった形で建てて
くださいというように法律の
規制と、それに伴う許可や届
出が発生します。生活や産業
などとの共存の調整が、洞爺
湖地区には多く、風景管理も
重要となってきました。

支笏湖の話となりますが、
特徴的なのは動力船規制をし
ていることです。国立公園は
静音を愛する方々も非常に多
く来る場所ですが、以前は
ジェットスキーの騒音や、水
辺で遊んでいる方々への危険
性、動力船で陸に着くスピー
スの問題など、他の来訪者の
利用機会を減らす可能性があ
りました。そこで地域の合意
を経て、自然公園法に基づき
動力船の乗り入れ規制を行
いました。

— 観光資源として多くの方に
訪れてもらうための取り組み
や、考えている事などあれば教
えてください。

これにより、規制以前と比
べ、格段に閑静で神秘的な湖
となり、一般の方々の利用機
会と利用環境を確保すること
ができました。さらに、その他
の騒音、迷惑駐車、ゴミの不法

投棄、ポイ捨て、リードを付
けないペットの散歩、指定場所
以外での火気の使用などの迷
惑行為や水辺利用・水遊びの
際のライフジャケットの着用
などで安全性を高めることな
ど、法律の規制だけでは解決
できない課題を、地域住民、
消防団、水難救助に協力いた
だく方々や宿泊事業者なども
参加する運営協議会で議論し、
大自然を安全に楽しく利用し
てもらおうローカルルールであ



「国立公園支笏湖運営協議会」では、支笏湖
ルールを設定し湖の適正利用を促している。



環境省 支笏洞爺国立公園管理事務所
国立公園の管理の他、パークボランティア活
動、自然観察会の開催、美化清掃、外来種対
策、自然環境調査などにも取り組んでいる。



環境省 支笏洞爺国立公園管理事務所
所長代理
櫻庭 佑輔



環境省 大雪山国立公園管理事務所
大雪山国立公園の優れた自然環境の保全と
適正利用を図るため、主に許認可・自然環境
整備・協働型管理運営の協議会事務局など
の業務を実施している。

国・自治体・地元で連携しながら、公園管理と魅力発信を進めたい 新ひだか自然保護官事務所



新冠町の牧草地から望む日高山脈。(写真提供/ピクスタ)

日高振興局と十勝総合振興局管内にまたがる「日高山脈襟裳国定公園」は、1981年に指定された。その国定公園を拡張する形で、2024年夏「日高山脈襟裳十勝国立公園」が指定された。国立公園化に伴い、新たに設置された新ひだか自然保護官事務所、陸域では国内最大面積となった国立公園の管理について伺った。

関係者と連携した国立公園管理を

— 新ひだか自然保護官事務所の活動概要について教えてください。 —
本公園は主に帯広自然保護官事務所と当所の事務所が管理しており、自然保護官(レンジャー)など計3名の環境省職員が配属されています。

当所は日高振興局管内7町(日高町、平取町、新冠町、浦河町、様似町、えりも町、新ひだか町)にまたがる区域を管轄しており、自然公園法に基づく許認可等の手続きの他、公園内の自然状況を把握するための現地調査や環境教育活動等を行っています。

本公園の管理運営については、2024年8月に設立された日高山脈襟裳十勝国立公園協議会の中で議論しています。この協議会は、関係する自治体や国の機関、自然保護団体、登山関係団体、観光関係団体等で構成されており、まずは本公園が目指すべき姿を示したビジョンの策定、その実現に向けた管理運営方針や行動計画等の検討、さらに本公園の管理運営上の個別課題とその対策などについて、総合的に議論しています。

日高山脈によって地理的に分断されている日高側と十勝側ですが、本公園の保護と利用を考える上で、両地域の連携は不可欠ですので、現地の自然保護官事務所が両地域の橋渡しの役割も担ってほしいと思います。

— 手付かずの自然が残る公園の利用と保全のバランスをどのように考えていますか? —

日高山脈一帯は潜在自然植生としては北方型の針葉樹林帯に位置し、自然度の高い森林が広がっています。樹種構成は、地形・地質・気象の影響で地域によって様相が異なります。

本公園の登山利用を考えた場合、登山道は沢山ありますが、ほとんどは整備されていない上級者向けのコースになっています。国立公園化により、上級者向けの登山道に



環境省 新ひだか自然保護官事務所 自然保護官 草留 大岳

容易に立ち入れるようになったと誤解されないような普及啓発が必要です。アポイ岳など日高山脈の中でも比較的登りやすい山もあるので、メリハリを付けた利用のあり方の検討が望まれます。道内の国立公園で多くの人を訪れる大雪山には、登山道のゾーニング「大雪山グレード」があります。整備状況などを、路線ごとに区画分けをして、利用者はそれを参考に自分のレベ



日高山脈襟裳十勝国立公園協議会設立総会の様子。(写真提供/環境省)

ルにあつた登山を楽しめるようになっているので、本公園でも参考にできる部分があると思っています。

保全の面を考えると、日高山脈は多くの河川の源流部となっており、これらは自然度が高く人口構造物が存在しないなど人為の影響が見られない原生流域で、本公園はわが国最大の原生流域を擁しています。

そのため、国立公園になったからといって安易に開発や整備を進めるとするのは、本公園にはそぐわないと思っています。

まずは、現状のくらしい利用者がいて、今後どのように推移していくか、高山植物を含め公園の利用が本公園の自然環境全体にどう影響を与えているのか把握も必要で、オーバーユースに繋がらないようバランスを取る視点が重要です。

これまでアポイ岳の環境保護や登山道などの整備に積極的に携わって頂いているアポイ岳ファンクラブ、山岳会等の方々を始め、協議会メンバーと連携を深め、本公園の自然環境の保護・保全に取り組みたいと思います。

— 公園の利用について、どのような利用の推進が必要だとお考えですか? —

本公園の核心部の利用形態としては、山が険しくアクセス道路が限られているので、夏期を中心とした本格的な山岳登山が主になります。これほどの広大な山脈でありながら整備された登山道や避難小屋はごく一部の山域に限られ、かつ多くのルートは沢登りや藪漕ぎといった難易度の非常に高い登山形態で、相応の体力・装備だけでなく、高度な登山技術が求められます。も

とも明治の頃から木材の伐採や植林なども行われていない原生的なエリアが多く、拠点として利用出来る場所も少なく、用地もないので、この自然環境を壊さないような利用を引き続き考えていかなければいけません。

日高山脈は険しく奥深いので、近づくほど全体が見えにくく、むしろ公園から離れた展望台や公園区域外のビューポイントを活用して、延々と連なる山並みや襟裳岬をはじめとする海岸景観を楽しむ利用を推進することも考えられます。また、本公園内にある幌尻岳、十勝幌尻岳、襟裳岬



日高山脈には沢登り(徒渉)を伴う登山ルートもある。(写真提供/環境省)

の3箇所が、アイヌ民族の物語や伝承、祈りの場、言語に彩られた優秀な景勝地群「ピリカノ」として国指定名勝の指定を受けているなど、アイヌ文化とも深い繋がりのある公園です。アイヌ文化に関わる視点場や博物館等を巡り、本公園の自然環境とアイヌ文

化とも深い繋がりがある公園です。アイヌ文化に関わる視点場や博物館等を巡り、本公園の自然環境とアイヌ文



十勝平野からは延々と連なる日高山脈の山並みを眺めることができる。(写真提供/環境省)



七つ沼カールと幌尻岳。(写真提供/環境省)



地元の子どもたちを対象に環境教育を行うこともある。(写真提供/環境省)

化の繋がりに思いを馳せる楽しみ方も考えられるかもしれません。

——自然環境を守りつつ、観光資源として多くの方に訪れてもらうための課題などあれば教えて下さい。

本公園の一番の魅力は、原始的な手つかずの自然が広大に残され、人里離れた自然の中に身をおけるところだと思えます。切り立った山頂に出ると、壮大な絶景と神秘的な空気に鳥肌がたつ感覚を覚え

ます。日高山脈の登山道の大半が上級者向けの登山道であり、人の手が入っていない踏み分け道程度の登山道を、藪漕ぎしながら稜線に取りつく、登山者の憧れである日高山脈の魅力はそこにあると思います。

一方、公園自体が広大ですので、一つのブランドインゲンで括るとするのは少し難しいと思っています。それぞれのエリアで、そこできしか体感できない固有の自然環境・文化資源を大切にし、各地域を巡

る広域的な利用を進めていきたいです。そのためには、公園区域外の観光利用拠点やそこで活動する地域の関係者との連携も重要だと考えています。道の駅やキャンプ場、温泉施設などが公園外にもあり、ドライブはもちろん、ツーリングやサイクリングのついで

にそれらの施設を利用される方も結構いると感じています。そういう利用者をターゲットにした周遊ルートを検討、開拓して、公園内外側を結びつ

ける事で、公園利用もそうですが、地域全体の観光利用推進・活性化に繋がってほしいです。

本公園にある国内最大の原生流域やカール等の水河地形を含む山岳景観、襟裳岬をはじめとする海岸景観、それらの自然環境が育む豊かな生態系をしっかりと守りつつ、公園の適正な利用を実現できるように、地域の皆さんの協力を頂きながら日々の取り組みを進めていきたいと思っています。



環境省 新ひだか自然保護官事務所
自然環境の保護や適正利用の推進にむけ、公園の管理や管轄区域における希少な野生生物の保全に関する業務に取り組んでいる。

特集1 国立公園の利用と保全

事例紹介
04

利用者の理解と協力を得ることが保全の鍵に

北海道日高振興局



北海道日高振興局
産業振興部
商工労働観光課 課長
(2023年7月時点)

前田 康行



北海道日高振興局
保健環境部
環境生活課 課長
(2023年7月時点)

中村 賢洋

登山者の安全・安心を関係者と一緒に推進

——令和6年6月25日に「日高山脈襟裳十勝国立公園」が指定されました。これまでの日高振興局の取り組みを教えてください。

道内の国定公園の場合、管理は北海道です。私は北海道でしています。私達は保護・保全の事業に携わっており、具体的には国定公園の管理者として、公園計画を策定し、施設整備や公園内各種行為の許可等を担当するほか、アポイ岳における高山植物保護等の活動への参画などがあります。

アポイ岳についてはヒダカソウの生育地保護のため、登山道以外の区域への立入りを制限しています。また、携帯トイレの使用、ストック使用時にキャップを着着すること等、類似町や地元の自然保護団体、自然保護監視員等と連携した、ルールの周知や高山植物の盗掘防止パトロールを実施してきました。また、木道の劣化や危険箇所の報告があった際には、関係機関と連携して検討し、自然に配慮し

た補修などの対応を行ってきました。この他、PR動画の作成や、インスタグラムの活用、キャンペーンの実施、フォーラムの開催など、十勝総合振興局とも連携しながら公園の魅力発信を推進してきました。

——国立公園化で観光利用者の増加も見込まれますが、交通インフラに関してはどのような整備が必要になってくるとお考えですか？

日高管内ではJR日高線の廃線に加え、人口減少などにより、バス事業者の減収減益に歯止めがかけられない状況が続いており、主要幹線道路を運行しているバス路線の維持・確保が懸念されています。今後は、地域の人流・物流の確保や国立公園へのアクセス向上のためにも北海道高速道路ネットワークの一翼を担う高規格道路「日高自動車道」の

整備促進がさらに重要だと感じています。

——「日高山脈襟裳十勝国立公園」の利用と保全のために、日高振興局で今後取り組む予定の施策などあれば教えてください。

国立公園は国の管理となりますが、これまで振興局が関わってきた自然保護監視員等による監視活動やアポイ岳における高山植物保護等の活動

には引き続き取り組んでまいります。自然環境の保全にあたっては、観光客をはじめとした利用者の理解と協力も重要です。観光プロモーションや現地での体験を通じて、自然環境や地域文化・歴史を知って頂き、環境や地域文化の保護への意識を高めて頂けるよう、受入体制の充実と情報発信に努めてまいります。



関係機関・団体等が連携し、希少植物の保全活動などを行っている。(写真提供/日高振興局)



北海道日高振興局
日高の魅力の世界に発信し、誘客促進とともに、自然保護と受入環境を整備していくなど、地域活性化に資する施策を総合的に実施している。

国立公園指定を機にますます増加しているアポイ岳の登山者。希少な高山植物や野生動物を守るため、管理と啓発活動が欠かせない。(写真提供/日高振興局)

函館 — その隠された歴史と遺産の数々

特集2 歴史ある都市の観光 基調レポート
函館 — その隠された歴史と遺産の数々



函館山から望む街並み。山頂付近には函館要塞の砲台跡など歴史を伝える遺構が残っており、平成13年(2001)に「函館山と砲台跡」として北海道遺産に選定。散策コースも整備されており観光客も訪れている。



写真1 元町の八幡坂、函館港内に摩周丸をのぞむ。手前左に元の函館白百合女子高、右に聖パウロ修道女会修道院。

ある。四角いコンクリート造なので宗教色が消えて見えるかもしれないが、元をただせばこの敷地一帯は元町教会群の中心として歴史的に大変由緒のある場所で、幕末からの函館の歴史が深く刻まれている。今日の函館に特徴的とされる坂道文化は、実のところ、変転する都市計画の副産物で、当初から存在していたわけではない。元町を含めて函館市

街は繰り返し大火に見舞われ、その復興のたびに区画整理を繰り返して、期せずして直線的に丘陵地を切り開く坂道がいくつも造成された。古いころではカトリック元町教会横の大三坂があるが、八幡坂についてはいえば現在の姿になったのは1921(大正10)年にこの地区を襲った大火によってあたり一帯が焼け落ちたことに起因する。復興に際

して、明治の初めからある白百合学園の土地を二つに切り分け、その間に防火帯として広幅員の火防線道路をつくったのが始まりである。

白百合学園は昔の名を聖保祿女学校という。第二次大戦後になって同じカトリック系のミッションスクールである札幌の藤学園や東京の雙葉学園と同じように花の名に改名した。仏語で「フルール・ド・リス」といわれる白百合の花模様はフランスの王権を示すシンボルであり、この学校がフランスと深い繋がりがあることがわかるだろう。明治の始め、1878(明治11)年にベトナム経由で来日したフランスのシャルトル聖パウロ修道女会がこの地に修道院と学校をつくり、隣にある元町教会とセットになって、ミッション系の施設群を構えることになる。

元町教会群

元町の坂を上ったこのあたりは、カトリックの教会と修道院に加えて、ロシア正教会と英国聖公会の教会、そしてアメリカ系のプロテスタントの学校(遺愛幼稚園)が建

諸外国文化の流入とその強い影響を受け、異国情緒あふれる町並みを形成している函館市。西部地区の歴史的景観は市民共有の財産であるという認識のもと、「函館市西部地区歴史的景観条例」が制定されている。この歴史のある観光都市の持続的な魅力創出のため、重要となる歴史的建築物の保存・利活用などについて、函館市を視察した三宅理一教授にご寄稿頂いた。

坂の町

函館の観光イメージとして好んで取り上げられる構図といえ、元町の八幡坂から港を見降ろすアングルだろうか(写真1)。春夏秋冬さまざまなバージョンがあり、どれも写真映えがする。幅広の道の両側がナナカマドの並木となつて季節感を演出し、はるか遠方には退役した青函連絡船の摩周丸の姿が見てとれるので、いかにも港町函館らしい。長崎や尾道など坂のある町は観光客にうけるというが、美観と歴史の組み合わせという点で函館は傑出しているようだ。

写真の左側には白いコンクリート4階建ての建築がたつている。現在はロシア極東大学の分校となっているが、かつては白百合学園の校舎で、1980(昭和55)年に学園が移転した後にロシアの学校の手に移った。その真向いに建つのが白百合の経営母体でもあるカトリックの修道院で



三宅理一
東京理科大学
客員教授

みやけ・りいち / 都市計画・建築計画、建築史・意匠などの研究の他、世界各地で遺産保護なども手掛ける。『モルドヴァの世界遺産とその修復』(羽生修二と共監、西村書店)など著書多数。日本建築文化保存協会理事も務める他、展覧会キュレーターとしても世界で活躍する。



写真2 函館ハリストス正教会(1916)、現在の聖堂は明治末の大火後に再建された。

設され、現在もそれがそのまま残っている。一見してエキゾチックな街並みである。幕末に函館(当時は箱館と記した)が開港され、欧米の公館や商館が建ち並ぶ地区へと変貌するにあたって、日本に進出したそれぞれの国が自国の宗教施設を持ち込んだのが始まりである。まだ禁教時代であったにもかかわらず、治外法権の居留地ということで、居留民に限ってミサや礼拝などの宗教行事に参加することが許された。

丘の中腹にあたり、見晴らしがよく良い水が取水できるこの土地に眼をつけたのはロシアであるが、それにイギリス、フランスが追随し、アメリカも遅れてこの場所に公館をつくらうとした。教会建設にあ

たって、ロシアはそのまま現在の地にハリストス正教会の聖堂を建てるが(写真2)、フランスの場合はやや面倒な経緯をたどる。パリ外国宣教会から派遣された最初の宣教師メルメ・カシャンは、1859(安政6)年、箱館上陸後、まずは奉行所の手引きによって浄土宗の称名寺の境内に寄寓し、そこに自宅兼礼拝堂をつくる。仏教寺院の中のカトリック礼拝堂という構図は節操がないように見えるが、神仏混淆が普通であった当時の仏教から見ると、地代を払いさえすればありがたい客人として迎える、という立場のようだった。これが初代の教会で、その後、1867(慶應3)年に現在地に移転するが、それも元々は米国が領事

函館 — その隠された歴史と遺産の数々



写真7 五稜郭(1864)。フランスのヴォーバンの稜堡をモデルに武田斐三郎が設計。中心に箱館奉行所。出入りは手前の堡壘から、城郭の虎口と馬出を思わせる。

この支庁の復原を行った際、敷地を

横に少しずらして公会堂を引き立たせるようにしたので、その位置がどこか不自然である。加えて、この庁舎は古典主義の規範のひとつである良きプロポーションの感覚が欠けている。正面のポーチ(扉口)が縦長に引き延ばされ、コリント式の円柱が細くなりすぎてファサードが台無しになっている。設計者は道庁営繕課の家田於菟之助とされるが、どうやら函館区の方が建築の美意識に対する理解が道庁よりまさっていたようだ。

シア領事館も延焼した。復旧にあたってロシアからの強いクレームで英国は別の地所に領事館を建て直す、火災の理由が、領事館に市中の名士や外交官を招いて演劇を上演した際、ストーブ番の番人がそれに気をとられ出火に気がつかなくなったというから、嘘のような話だ。演目は何であったか調べたくもなる。ロシア領事館の移転は、ずいぶん後の話で、一度閉鎖された山の反対側の船見町に移して再開した。北洋漁業や日本海の物流の関係で領事業務が増えたことが大きな理由である。横浜のドイツ建築家デ・ラランドによるルネサンス調の煉瓦建築である。

中国の会館もある。幕末になって欧州諸国の領事館が注目される中で、清国との外交関係はあまり日の目を見てこなかった。条約が未締結で奉行所が清国人に対して外交上の規定を課していなかったこと、さらに、1874(明治7)年になって清国との間に条約が結ばれるも、領事派遣がなく、清国人商人たちは欧米人商人の名義を借りて取引をし

(写真7)ができたことで、奉行所の中核部分はそちらに移転するが(1864)、この敷地はいかかわらず御殿といわれ、奉行所の付属施設として用いられていた。明治に入った後、五稜郭の奉行所は取り壊しとなり、改めてこちらの役所が開拓使支庁とされ、行政府の役割を果たす。元町地区を襲う何度もの大火に際しては、他の建築群と同じ運命をたどり、結局のところ、大半の建築が失われてしまう。煉瓦造の書籍庫(1880)だけが類焼を免れた。土蔵を

煉瓦に置き換えてつくった耐火建築で、二階建の洋風デザインとすることで建設当初から目立っていた。旧金森洋物店(1880)と並んで明治初頭の貴重な遺構として今日に伝わる。函館で現存する明治建築でもっとも古いのは、その1年前に青柳町の函館公園で開かれた博覧会のための施設、旧函館博物館2棟(1879)であり、明治初年のものがわずかに数棟しか残っていないのは火災多発都市としての宿命というべきだろうか。明治末の大火の後で再建された北海道庁支庁の庁舎(1909)は今日まで保存されている。もともと奉行所の敷地に對して軸線の役割を果たしてきた基壇の上端にアイストップとして建設され、翌年にその背後の一段と高くなった敷地に公会堂がつくられる。1980年に解体された材を使ってこの支庁の復原を行った際、敷地を

支庁舎の下、基壇に沿って煉瓦造の旧英国領事館(1913)がたっている、これも大火後の建築だ。幕末から明治初めにかけて函館には結構な数の領事館があったが、現在、領事館建築として残っているのはこの英国領事館と船見町の旧ロシア領事館(1908)(写真8)のみである。年代順にみれば、真つ先にロシアが大工町(後の元町)に領事館を構え、その隣に英国、坂を少々下がってフランスがそれぞれ領事館を建設する。ところが、1865(元治2)年の冬に英国領事館がストーブの不始末から炎上、隣のロ

シア領事館も延焼した。復旧にあたってロシアからの強いクレームで英国は別の地所に領事館を建て直す、火災の理由が、領事館に市中の名士や外交官を招いて演劇を上演した際、ストーブ番の番人がそれに気をとられ出火に気がつかなくなったというから、嘘のような話だ。演目は何であったか調べたくもなる。ロシア領事館の移転は、ずいぶん後の話で、一度閉鎖された山の反対側の船見町に移して再開した。北洋漁業や日本海の物流の関係で領事業務が増えたことが大きな理由である。横浜のドイツ建築家デ・ラランドによるルネサンス調の煉瓦建築である。

たため、表立った史資料がないという事情もある。デンマーク商人デュースはそのあたりの名義ビジネスで結構稼いでいたらしく、フランス領事館の建物もデュースが引き取って南京屋敷の名で清国人の商団に貸していた。函館に集まった清国人は昆布や海鼠など海産物を扱う富裕な中国商人で、長江下流の浙江省や江蘇省出身者が多かった。横浜の居留地に住んでいた清国人の多くが欧米人の使用人であったのとは大きく違う。現在残る中国関係の建築というと、弥生小学校(昔の称名寺・浄妙寺の跡地に建設)のはず向かいにたつ函館中華会館(1910)であろう(写



写真3、4 カトリック元町聖堂(1910)。幕末に創建、現在の聖堂は1921年の大火後、被災したネオゴシックの聖堂を復旧。祭壇は南チロルの工房に特注。



79(明治12)年の大火で焼け落ちて再建、その後1907(明治40)年に再び大火に遭って焼失、現在の聖堂は1916(大正5)年に建設された三代目である。カトリック元町教会も同様に被災し、1924(大正13)年に焼け残った躯体に増築するかたちで現在の聖堂が

完成した。これまで大正末の再建と考えられ案内書にもそう記載されてきたが、近年の調査研究で、1910(明治43)年再建の聖堂の煉瓦造の壁体や延焼を免れたステンドグラスをそのまま使い小屋組など木造部分を架け直して復興したものであることがわかってきた。従来の説を覆し、函館に残る貴重な明治建築のひとつとして扱うべきである。白百合学園に関しては、度重なる大火でオリジナルの建築のすべてを焼失し、しかも移転してしまつたので、明治大正の建物はまったく残っていない。重要なのは、幕末に建てられたデンマーク領事館の建物やシャルトル修道女会の手に渡って修道院に改装され、校舎を拡張して現在の規模に到つたという事実である。このあたりの不動産取引を差配したのは、幕末から明治にかけてこの地で活躍したデンマーク人商人J・H・デュースで、デンマーク領事やフランス代弁領事を務めたりして外交官の顔ももっていた。生涯函館に住み続け、彼の墓は外国人墓地の一隅に設けられている。

元町教会群から歩いて北に5分ほどのところにあるのが、函館でもっとも目立つ歴史的建造物ともいわれる旧函館区公会堂(写真5、6)(1910)である。「区」というのはその頃の北海道で用いられていた都市部の地方区分で、今日の「市」と理解すればよい。この時代の公共建築で流行つたコロンナアル風の折衷主義スタイルを基調とした二階建ての木造建築、修復にあたって当初の色彩であった青と黄色で塗装したためにやけに派手な印象だ。アメリカの中西部あたりにありそうな色彩感覚といつてよいだろうか。設計者は区の営繕技師小西朝次郎、洋風デザイナーに書院風室内がうまく混ぜ合わされ、地方都市の営繕組織であつても腕のたつ建築家が存在したこと物語っている。ただの公会堂ではなく、翌年に控えた皇太子(後の大正天皇)行啓を考慮して、行在所としての宿泊機能がそなわっていた。当時の寝室や御座所などがきれ

いに復原されている。札幌の豊平館(1880)を先駆とする北海道迎賓館のひとつに数えられる。この場所は幕末の箱館奉行所の所在地であり、諸外国に門戸を開いたばかりの日本国の外交折衝の表舞台であつた。港を一望する高台に造成され、その下の斜面をひな壇状に造成して役人のための役宅や同心長屋、さらには蝦夷地防衛を目的とした東北諸藩の藩兵の陣屋などを配置していた。やがて箱館山からみて遠方に広がる原野の途中に五稜郭

館を建てようとして奉行所に土地の確保と造成を寄託した場所であつた。資金がショートしたために工事は中断、そこに横浜のフランス公使館が介入してこの土地を譲り受け、聖堂を建設する。ちなみの当初のフランス領事館はその隣、一段低くなった敷地にあつた。何度も火災にあつたが、現在そこにたつ分離派風デザイン

十分にその価値がある建物である。ハリストス正教会とカトリック元町教会(写真3、4)はともに函館を象徴的に表すものとしてよくポスターに用いられる。正教会とカトリックということで、典礼や建築原理は異なっているが、隣同士の関係もあつてか、建設、被災、再建のプロセスはよく似ている。正教会は正式名を「主の復活聖堂」といい、1860(万延元)年に現在地に領事館とともに建てられた。それが18

行政府と外交拠点

写真5、6 旧函館区公会堂(1910)、大火後に元奉行所上の敷地に市民たちの寄付によって建設。皇太子の行在所を兼ねる。



函館 — その隠された歴史と遺産の数々



写真12 四稜郭(1868)、官軍の攻撃にそなえ野戦陣地として建設。ジュール・ブリュネの設計。四方方向に向けた陵堡に砲座が置かれた。(写真提供/函館市教育委員会)

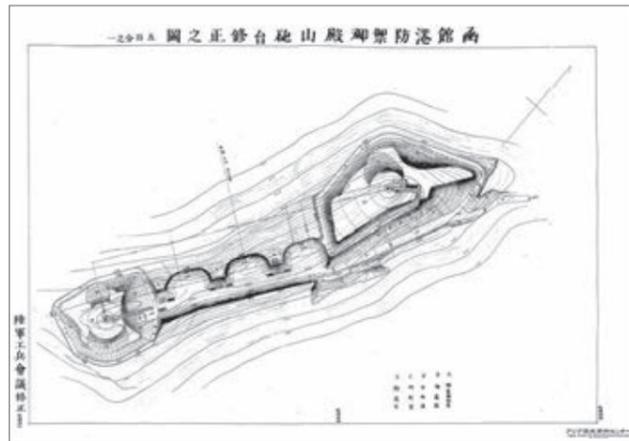


写真13 「函館防衛御殿山砲台」(第二砲台)設計図(1898)、三基の砲座の左右に観測所、海からは直接見えない。(防衛省防衛研究所蔵)

拓を目的としてトラピストを蝦夷地に招き旧幕臣たちとともに蝦夷地の開拓事業を動かす心づもりであった。榎本軍が敗れるのでこの構想は反古となってしまうが、カトリック教会側は約束を守り、四半世紀後に男女のトラピスト修道会を函館に派遣し、農地開拓をとまらぬ修道活動を始めることになる。

幕末でも明治でも函館の戦略的価値は変わらない。明治新政府は維新の過程で箱館から幕府の残滓を一掃しようとして

五稜郭の奉行所は取り壊され、弁天台場は一時は陸軍の砲兵部隊(函館砲隊)の駐屯地となるが、手狭のため明治半ばになって破却されてしまう。その中で浮かび上がってくるのが国内の治安以上に国際社会の緊張と近隣国との紛争である。津軽海峡は国際法で認められた国際海峡なので外国船が自由に通行できる。逆にいえば、それだけ攻撃される可能性が高いということである。明治20年代に入って陸軍は函館を要塞地に指定し、

大々的な砲台建設が決定された。「函館港防衛砲台」と呼ばれ現地調査の結果、津軽海峡を見下ろす函館山の五か所にそれぞれ砲台が置かれる(写真13)。

今日、函館の隠れた名所といわれるのがこの砲台跡である(写真14)。尾根筋にそって土地造成を行い堡壘を築設、そこにコンクリートで砲床をつくらせて28センチ榴弾砲を据える。兵員や弾薬のためのアーチ型の地下構造物ともなう、全国一律の標準設計を採用し、

1カ月程度の工事で完成した。この砲台建設の責任者は砲工兵会議議長の古川宣警少将である。歴史好きの人間には彼の名はよく知られている。1880(明治13)年に榎本武揚海軍大臣によってペルシャに派遣され、建築家としてペルセポリスやイスファハンをつぶさに見学し、また通訳として雇い入れたドイツ人言語学者のアンドレアスから古代ペルシャ、ゾロアスター教について深く学んで帰国した人物でもある。その後、要塞畑を歩み、東京湾要塞など多くの築城を手がけた。函館要塞(1898)はその最終形といってもよい。日露戦争の勃発とともに函館山は緊張に包まれるが、この砲台が実戦に用いられることはなかった。

資源としての歴史遺産を眺めてきた。これらの遺産が人々に共有されるには、それ自体がレプリカでなく本物である(オセンシティブ)と同時にその背後に歴史と空間をめぐる大きな物語(ナラティブ)があることが肝要だ。実際、函館は短い歴史にもかかわらずそれが詰まっている。自治体、地域住民、そして外国人を含めてこの町を愛する多くの人々がこの遺産の系を大切に守り、育てていくことが重要である。

写真14 御殿山第二砲台砲座跡、コンクリートの胸壁で囲んで砲座をつくり、28センチ榴弾砲を設置、保存状態は良い。



写真9 函館中華会館(1910)、在函華僑の寄付により関帝廟+集会所として建設。道路に面し端門、奥の廟堂屋根を正脊(大棟)と鴟尾が飾る。



写真10 相馬株式会社社屋(1914)、豪商相馬哲平の事業会社。木造にネオバロックの語彙を詰め込んだ。

真9) 関帝廟をともなった集会所で、外交施設ではないが、函館在住の華僑が資金を出しあつて建設に至った。横浜や長崎の関帝廟は戦災で焼失し、戦後の再建になるが、こちらは明治末の建築がそのまま生きていて遺産学的にも興味深い。配置は手前(南面)に端門、中庭(院)を挟んで廟堂という伝統形式を踏襲しているが、冬の積雪を考慮して中庭には屋根がかかりトツプライトで採光する。端門は道に面した四角いファサードの形態にまとめられている。その左右の入口には「山輝」と「川媚」の扁額が掲げられているが、これは魏晉時代の中

国で記された陸機による文芸論『文賦』からの引用である。山と川に託した風景のエッセンスを会得するにあたって美しいものを美しいといえる感情の高まりが必要だという意味だが、陸機が江蘇省蘇州の出身ということと同郷のよしみでこの語句を選んだのではないだろう。中国から職人を呼び家具調度も中国製ということまで細部まで蘇州風のデザインが行き届き、煉瓦造の耐火建築とあいまって国内でも江南エリアの清朝デザインを伝える第一級の建築遺産であり、近傍の相馬株式会社社屋(1914)などと並んですぐれた景観を生み出してい

る(写真10)。

五稜郭から函館山に

五稜郭は幕府が建設した国土防衛のための城郭であるが、その土地利用、全体のフォルム、防衛思想は従来の城の概念をことごとくくつがえす。しいていえば、石垣を囲む堀が水堀になり、出入口の堡壘もひとつに限り「馬出し」の形状となっている点で日本の城郭思想を引きずっていると考えることもできる。

幕府の器械弾薬方を務めていた大洲藩士武田斐三郎が、たまたま箱館に寄港した仏艦コンスタンチヌの艦長から

ヴァーバン式の築城図面を渡されたことから五稜郭のアイデアが始まったともいわれる。欧州では当然となっていた稜堡式の城塞について研究を深め、フランス式の新たな築城原理で建設したのがこの要塞である。その内側に奉行所、外側に役宅群を配して新たな行政庁をつくらせたが、砲撃戦を前提に建築を高く目立たせることは憚られた。箱館の防衛ラインとしては、この五稜郭と合わせて箱館山の麓に弁天台場をつくり、また五稜郭近くに造成されていた津軽藩の陣屋が大きな役割を果たしていた。それゆえ戊辰戦争の最後となる箱館戦争では攻城戦、つまり陣地の取り合いが何度も繰り返されたが、その組織的な戦術はあまり注目されず、新撰組的な土方歳三の戦法のみが話題になる。ちなみに、戊辰戦争の過程で大々的な攻城戦となったのは越後の長岡城、福島の白河城と会津城くらいで、伝統的な日本の城郭は榴弾砲などの近代兵器に対して脆弱であった。榎本軍に加わったジュール・ブリュネ砲兵大尉が稜堡式の五稜郭でどのように作戦を立

ていたか大変気になるところである(写真11)。

このブリュネは新政府軍の攻撃にそなえて五稜郭の北側に野戦陣地として四稜郭の建設も行った(写真12)。現在訪れてみると土塁のかたまりとなつて考古遺跡のようにも見える。近傍の人々が訪れる静かな緑地公園になっているのが心地よい。ブリュネは榎本武揚のために蝦夷共和国樹立のための建白書のドラフトを認めている。その手稿はパリのアーカイブに残されていて日本では未紹介だが、その頃長崎で繰り広げられていたキリシタンの弾圧(浦上四番崩れ)に驚愕し、信教の自由を掲げて新天地の構想を練ったようだ。そのために原野開



写真11 箱館戦争時の私人士官・下士官と旧幕臣。ジュール・ブリュネ(前列左から二番目)と松平太郎副総裁(右隣)。

事例紹介 01

創業の地である小樽市の、
地域振興に貢献していきたい
北海道中央バス株式会社



『小樽バイン』として活用されている「旧北海道銀行本店」(現在の北海道銀行とは異なる)。築113年、銀行建築ならではの重厚さが目を引く。

かつて「北のウォール街」と呼ばれ、北海道一の金融都市として繁栄した小樽。色内地区には今も数々の銀行建築が保全・活用されている。明治末期に建造された旧北海道銀行本店は、ワイン&カフェレストラン『小樽バイン』として、地元で愛されている。事業を展開する北海道中央バス株式会社に、歴史的建造物を守る意義について伺った。

歴史的価値のある
建物を取得した理由

まずは建物の概要と、北海道中央バス株式会社が取得した経緯を教えてください。
太田 弊社の本社ビルでもあり、また北海道のワインと食を堪能していただくカフェレストラン『小樽バイン』として活用しているこの建物は、

かつて「北のウォール街」と呼ばれ、北海道一の金融都市として繁栄した小樽。色内地区には今も数々の銀行建築が保全・活用されている。明治末期に建造された旧北海道銀行本店は、ワイン&カフェレストラン『小樽バイン』として、地元で愛されている。事業を展開する北海道中央バス株式会社に、歴史的建造物を守る意義について伺った。



観光事業推進本部
観光事業統括部 部長代理
太田 真司



ワイン&カフェレストラン
『小樽バイン』店長
坂田 健一

明治45年(大正元年)に建築された「旧北海道銀行本店」です。設計は日本近代建築の父とも呼ばれる辰野金吾の弟子であった長野宇平治で、「日本銀行旧小樽支店」も彼の設計です。昭和19年からは北海道運局の庁舎として使用され、昭和40年に当社が取得し、本社ビルとなりました。一部増築などしておりますが、外観はおおむね創建当時の姿を残しています。

昭和60年に小樽市指定歴史的建造物(第6号)の指定を受け、平成8年に『小樽バイン』を開業しました。
—— 御社では他にも歴史的建物を取得されていますか。
太田 銀行街の中心に位置する『小樽運河ターミナル』の建物が弊社の第2ビルとして、大正11年に建築された「旧三菱銀行小樽支店」です。昭和

58年に事務所として取得し、平成2年に小樽市指定歴史的建造物(第18号)に指定されました。ここでは現在、ワインやお土産などを販売する他テナントも2店入っています。
—— こういった歴史的建造物を取得し、活用していく意義はどのようなところにあるとお考えですか。
太田 弊社は小樽で創業した会社で、今も本社所在地は小樽です。取得当時は「北のウォール街」と呼ばれたこの地区を代表する建物を、活用しながら保護することで小樽市への地域貢献をしたいという視点があったのだと思います。そのため、増築や改修などは建物の外観に影響がないように配慮しています。そして、ただ残すだけではなく、有効活用するということが非常に重要だという考えのもと、

新規事業として『小樽バイン』や『小樽運河ターミナル』を立ち上げ取り組んでいます。
歴史的建造物の指定で補修や一部改修も慎重に
—— 建物の維持に苦労している点がありますか？
太田 従前より歴史を感じさせる外観は極力保護していましたが、指定を受けてからは、何か手を加える場合は、小樽市さんとの協議が必要になり、

勝手に私共だけでやるという訳にはいかなくなりました。例えば外壁塗装する際に、塗料の色も指定があったり、庇のある部分をちよつと変更したい時も市との協議が必要です。エアコンを設置する際には室外機を見えないところに配置しなくてはならなかったり。指定を受けている建物を所有している皆さんは、どこも同じ苦労をされているのだとは思いますが、出来るだけ手続きの迅速化、簡略化をお願いしたいところです。

坂田 また、外



天井部分は吹き抜けだったところを2階として増築しているが、石造りの壁や窓などは創建当時のまま。

観を派手に装飾できません。営業的な面で言えばもっと出したところですが、看板なども最低限にしています。加えて、どうにも厳しいのがバリアフリーの改修です。『小樽バイン』の正面入り口には階段があります。スロープをつけることは難しく、建物側面である

うと新たに壁に穴を開けるなんてこともできないので、その辺が悩ましいところです。
太田 小樽市には「小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例」があり、小樽市登録・指定歴史的建造物を保全するための技術援助や融資のあっせん、外観の保全に要する経費の一部について予算の範囲内で助成を受けることができます。こういった建物の持続的な保護といった観点から、維持に関わる費用の助成をもっと拡充して頂ければと思います。

歴史を物語る建物と共に、これからも

—— 御社はバス事業がメインですが、このような歴史的価値のある建物を活用した飲食事業との相乗効果やメリットなどはありましたか？
太田 バスと観光施設の親和性は非常に高いものですから、やはり相乗効果があります。コロナ禍では大人数の受け入れが十分にできなかったことや、最近では乗務員不足でツアーの調整が難しいなどの課題はあります。しかし、



本社の第2ビル兼『小樽運河ターミナル』として活用している「旧三菱銀行小樽支店」。築103年、鉄筋コンクリート造4階建。

活動しています。秋の終わりに街路樹の落ち葉拾いをしたり、「小樽雪あかりの路」の期間中に建物のライトアップをしています。
太田 ドラマや映画のロケに建物を使ってもらうことで観光振興につなげていく「ロケツーリズム協議会」にも参画しており、いいお話があればぜひ乗っていきたくですね。

現在小樽バインでは店舗の運営体制の再構築や店舗内の改装などの見直しに着手しており、今後は地域振興に資するようなツアーにも力を入れて、観光事業の活性化につなげていきたいと考えています。
—— この建物を活用し、自治体や市民と連携で活動されていることはありますか？
坂田 中央バスは「おたる日銀通りまちづくり景観協議会」に加入しておりまして、これは歴史的建造物が立ち並ぶ日銀通りの地域特性を活かして、観光客にも喜ばれるまちづくりを推進しようという目的で



北海道中央バス株式会社

●1943(昭和18)年創立
一般旅客自動車運送事業(乗合・貸切)を中核として、飲食、公衆浴場、観光・旅行、不動産、建設など、地域社会に密着した事業をグループ企業で多角的に展開している。

野生動物と共生する社会を目指して

北海道がまとめた、記録のある1962年〜2024年7月のヒグマによる人身事故158件のうち、林業関係者と思われる人が被害に遭った事故は22件あり、全体の14%である。全体数から見るとこの数値は、狩猟関係者(40%)、山菜・きのこ採り(26%)に次ぐ数で、必ずしも多いとは言えないかもしれないが、ヒグマとの遭遇リスクの最も高い職業の一つである林業とヒグマの共存に関する研究は重要であろう。

私は有限会社ノーザンレーシング(本来は馬の会社)と住友林業株式会社と共同で、林業経営とヒグマの存在の両立に関する研究を現在も続けている。調査地の苫小牧市植苗ノーザンレーシング社有林は新千歳空港の南西側約2kmに位置し、総面積は約900haである。地形は樽前山、風不死岳、紋別岳から東に伸びる斜面山裾の緩やかな傾斜地で、ウトナイ湖に流下する河川の源流域である。林内にはカラマツの植林とミズナラ等の落葉広葉樹の二次林が広く分布している。

この社有林では、「持続可能な森林経営」のための基準指標として「モントリオールプロセス」(<https://www.montreal-process.org/>)を採用しており、木材生産と生物多様性の保全の両立を目指した森林経営を実施している。ここにはヒグマのコリドー(通り道)が存在することが以前より知られており、森林生態系の頂点に立つヒグマによる利用と安全な林業作業の両立が求められていた。

研究に取り組むにあたっては、企業との共同研究であること、私の大学在職の時間が

近年また徐々に増加しつつある。増え続けるヒグマやエゾシカ、あるいはタンチョウ、オジロワシなどの大型鳥類、そして減り続ける人、両者の間の軋轢は解消できるのだろうか?そして人も野生動物も「被害者」にも「加害者」にもならないで共存する北海道へどうすれば近づけるのだろうか?30数年間をそのための研究と教育に費やした経験を、いくつか紹介していきたいと思う。

シング(本来は馬の会社)と住友林業株式会社と共同で、林業経営とヒグマの存在の両立に関する研究を現在も続けている。調査地の苫小牧市植苗ノーザンレーシング社有林は新千歳空港の南西側約2kmに位置し、総面積は約900haである。地形は樽前山、風不死岳、紋別岳から東に伸びる斜面山裾の緩やかな傾斜地で、ウトナイ湖に流下する河川の源流域である。林内にはカラマツの植林とミズナラ等の落葉広葉樹の二次林が広く分布している。

残り少ないこともあって、スピード感を持って三年計画とした。最初の一年はまずは状況を把握するための予備調査、二年目はその予備調査をもとに方針決定のための本調査、そして実施後の三年目はその方針で正しいかどうかのモニタリングと必要であれば方針の微調整や軌道修正を考えるという計画である。

まず、最初の一年(2021年度)は、林内のどこをヒグマが利用・通過しているかを把握するため、あらかじめ利用が想定される沢筋の林道と林に接する高速道路のカルバートなどにカメラを配置した。そのほか林内にある足跡や糞などの痕跡も地図上に落とし、その点を結ぶことでヒグマの移動ルートの把握に努めた。その結果をもとに二年目の本調査では、二つのヒグマ

の移動ルートを想定し、そのルート上にカメラを設置した。一方で、ルートの候補地からは外れるが2022年度末からの皆伐や間伐などの作業が予定される場所にもカメラを配置してヒグマの出没状況を調査した(図2)。

二年目の本調査の結果、やはり想定した二つの移動ルート上のカメラでの撮影枚数が圧倒的に多かったため(写真1)、ここをヒグマのコリドーと確定して、基本的に林道の補修など以外は作業を行わないこととした。ヒグマと林業の「空間的すみわけ」を実施するゾーンである。一方で、この二つのルートほど頻繁ではないが、伐採などの作業が予定される場所でもヒグマは撮影された。そこでその部分では、「時間的すみわけ」を考えることにした。

写真1 ヒグマのコリドーを通過する親子。手前がメスと思われる子で後ろが母親。(撮影/柳川久)

ヒグマと林業の「時間的すみわけ」のため一日の時刻単位でのすみわけを考えた。図1の横軸は5月から11月までの季節、縦軸は一日の時刻を示し、図の点がヒグマの撮影された時刻の分布を示している。図の中の二本の横線は下の線が午前9時、上の線が午

特集3 自然と共生する社会 基調レポート
野生動物と共生する社会を目指して



国道273号「三国峠」で撮影されたヒグマ。(撮影/塩原真)

昭和の最後の年(1988)に北海道・十勝の大学に着任した時、新聞報道などでヒグマの個体数はおおよそ2000〜3000頭と言われていた。その数は5000頭に上方修正されたが、一般の人が考える北海道のヒグマの個体数は長らくそんなものだったろう。それがいつの間にか1万頭を越え、2024年3月での推定個体数は1万2220頭である。

すことを目標にしている。北海道が2024年に行った意識調査では、ヒグマに対して「捕獲して減らすべき」という意見が「どちらか」というも含めて59.0%と最も多くを占めたが、「できるだけ殺さずに対応すべき」という意見も26.5%あった。

同様にエゾシカの推定個体数は2023年度で73万頭、同年の捕獲頭数は15万7000頭、2024年度の目標捕獲数は18万5000頭である。エゾシカによる農林業被害額は、48億4600万円、かつての最大値である64億円(2011年度)よりは減少したが、



柳川 久
帯広畜産大学
名誉教授

やながわ・ひさし/野生鳥獣の生態や保護管理に関する教育・研究のほか帯広畜産大学理事・副学長として大学の運営に携わる。他に帯広市教育委員、北海道開発局や北海道、十勝管内市町村の各種委員など幅広く活動。『野生動物のロードキル』『北の大地に輝く命』(いずれも東京大学出版会)など著書・論文多数。

野生動物と共生する社会を目指して

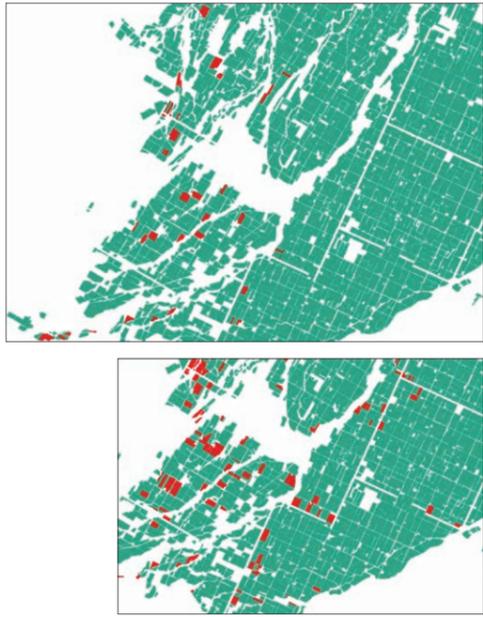


図3 ヒグマ(上)とエゾシカ(下)によって被害を受けた畑(赤い部分)。

ヒグマ、エゾシカが河畔林を移動していることはわかったが、そのことと実際に被害に遭う畑の関係はどうか? 十勝地方中部の芽室町で、芽室町役場と芽室町

人の生活・生産と野生動物の多様性を守る事ができるのだろうか? 河畔林が多様な動物によって、少なくとも移動のために使われていること、またその河畔林と防風林などがつながることが多様性を保つために必要であることがこれまでの研究でわかってはいた。ただ、記録された動物種を見ると、とても調査に協力してくれた農家さん達に「こんなにクマ、シカ、キツネにアライグマまで通っていて、生物多様性がすばらしい」などと言えたりはなかった。野生動物管理という観点から見れば、河畔林や防風林の存在は、生物多様性というプラス面だけでなく、害獣や移入種・外来種の通り道であるというマイナス面の評価もしなければいけない。それらをトータルで把握して、河畔林や防風林の管理をどうしていくかを考える必要がある。

タンチョウとオジロワシ
— 増えた希少種との共存を目指す

タンチョウは十九世紀の半ばころまでは北海道全域の湿原に生息していた。しかし明治以降の乱獲と生息地の破壊で急激にその数を減らし、一時は絶滅したと考えられていた。幸いなことに十勝羽が釧路湿原で再発見され、給餌などによる保護策が実って現在では個体数が回復している。

現在のタンチョウの個体数は3050羽、そのうち1650羽と世界中の個体の半数以上が北海道東部に生息している (IUCN Red List 2016; 環境省ホームページ <https://www.env.go.jp/kisho/hogozoushoku/taicho/>)。

夏場の繁殖地は釧路湿原から十勝川流域などに広がっているもの、越冬地は餌付けの行われている阿寒釧路地域に集中している。多数のマナヅル・ナベヅルが越冬する鹿児島県の集団で2010年に鳥インフルエンザによって死亡するツルが出たため、タンチョウの越冬地でも同様のことが起こる危険性がある。

そのための環境省では、2013年に「タンチョウ生息地分散行動計画」を策定し、繁殖地や越冬地の分散化を目指している。ところが十勝川中流部では、それに先立つこと15年前の1998年から産官学協働で「タンチョウ十勝移住作戦」を展開し、道内のどの地域よりも早く、タンチョウの繁殖地・越冬地の分散に成功している。

「タンチョウ十勝移住作戦」の最初の取り組みは、北海道

河畔林と防風林
— ヒグマとエゾシカの通り道

北海道十勝は、北の東大雪山系、東の阿寒・白糠丘陵、そして2024年に新たに国立公園となった西の日高山脈と、三方を国立公園の山々で囲まれ、南は太平洋に面する最も面積の大きい支庁である。そこには約32万5千人が暮らし、カロリーベースで約380万人分の食料を生産する、食糧自給率110.0パーセントを越える日本最大の食糧基地

帯広市の市街地や農耕地はかつて森林であった土地を切り開いて造られた。かつてそこには多くの野生動物が暮らし森林が広がっていた。開拓以前の森林はほとんど失われてしまったが、わずかに残る防風林と河畔林のネットワークには驚くほど多様な野生動物が息づいている。生物の多様性を保つ動脈となるこのネットワークは、同時に人の生活・生産圏に有害獣を導く通り道でもある。どうすれば、

問題となるのは6月〜9月中旬までにかけてで、この時期はヒグマも日中活動しており、遭遇リスクが生じる。この時期はヒグマの交尾期にある。

現在のタンチョウの個体数は3050羽、そのうち1650羽と世界中の個体の半数以上が北海道東部に生息している (IUCN Red List 2016; 環境省ホームページ <https://www.env.go.jp/kisho/hogozoushoku/taicho/>)。

夏場の繁殖地は釧路湿原から十勝川流域などに広がっているもの、越冬地は餌付けの行われている阿寒釧路地域に集中している。多数のマナヅル・ナベヅルが越冬する鹿児島県の集団で2010年に鳥インフルエンザによって死亡するツルが出たため、タンチョウの越冬地でも同様のことが起こる危険性がある。

現在では社有林内にヒグマの移動経路を確保するためのヒグマコリドーゾーン、生物多様性を涵養するために人工の水場を設置する水場ゾーン、皆伐、間伐や生物多様性を向上させるため広葉樹の植林を行う林業作業ゾーン(図2)、を設けて林業の経営と生物多様性の両立を図っている。特に人工の水場はヒグマ(写真2)などの哺乳類やオオタカなどの猛禽類、小鳥類に頻繁に利用されており有効に機能している。これらの取り組みは外部からも評価され、植苗

後5時でこの上と下の線の間が一般的な人の勤務時間である。ヒグマは基本的には夜行性であるが、季節により一日中動く周日活动性でもあり、調査の結果もほぼ同じ傾向を示している。ただ、細かく季節を見ると、5月と9月下旬以降はほぼ夜行性の動物で、この時期は人間の活動(作業)との時間の重なりはない。

たりに、特にオスと思われる個体の日中での撮影頻度が高かった。遭遇確率をゼロにすることはできないが、工夫によって減らすことは可能である。たとえばヒグマの撮影頻度の比較的高い夕方の一時間を早く切り上げ、午後4時に仕事を終えるだけで遭遇確率を23%減らすことができるのである。このように空間的なすみわけができない場所では、時間的なすみわけを心がけることでヒグマとの遭遇リスクを減じることが可能である。

このように、本調査研究の現時点での結果から、ヒグマの移動ルート、時期、時間を把握することで、ヒグマと人の遭遇確率を低減させて作業の安全性を高める可能性があること、水場などの設置でヒグマの立ち寄り場所を創出する可能性があること、森林経営にヒグマとの共生という選択肢ができることで企業イ

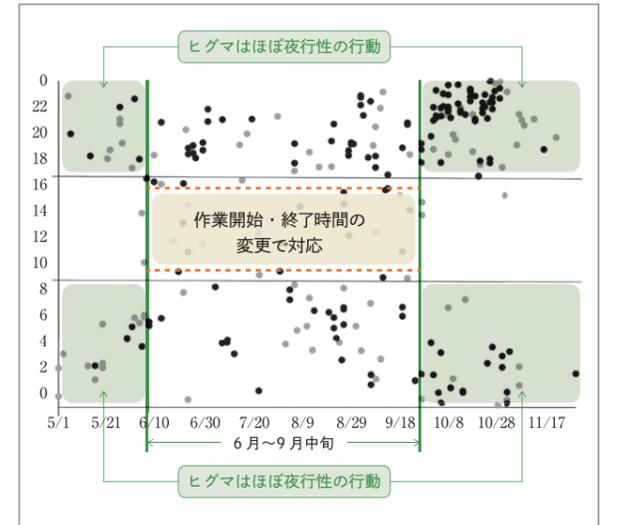
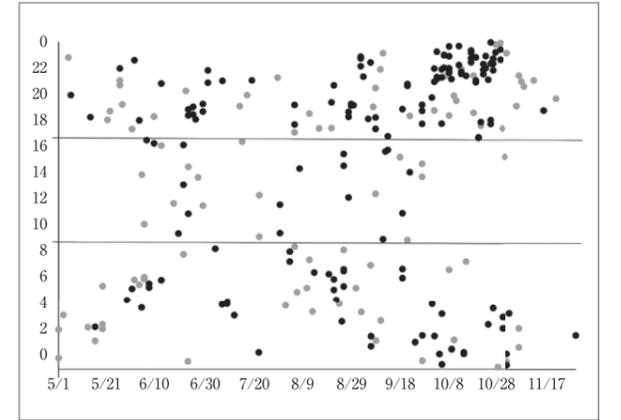


図1 ヒグマの撮影時刻の季節変化(上)と分析結果(下)。縦軸は一日の時刻で横軸は5月から11月までの月。

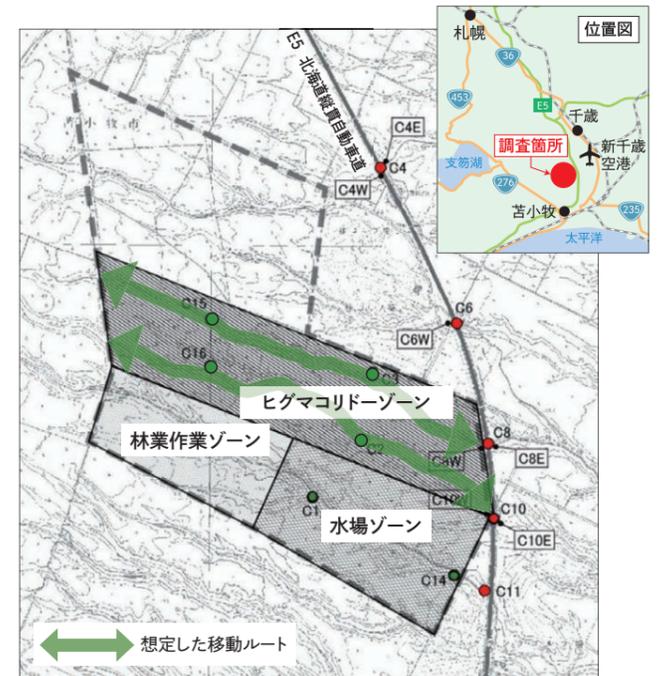


図2 ノーザンレーシング植苗社有林のゾーニング。



写真2 人工の水場でくつろぐオスのヒグマ。(撮影/柳川久)

野生動物と共生する社会を目指して

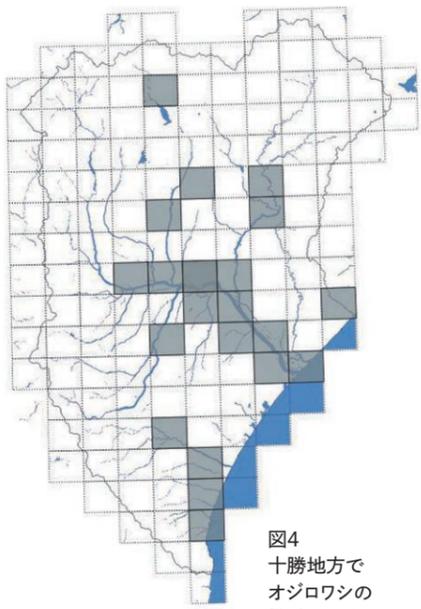


図4 十勝地方でオジロワシの繁殖したメッシュ。



写真4 ワシのなる木。(撮影/広沢 圭司)

でも、治水のための河川での工事や道路造成のためのアセスメント調査時にオジロワシの巣が新たに発見され、調査や保全対策のために工事が一時ストップする例が複数あったことから、まずはオジロワシの繁殖の現状を把握してみることにした。

希少な猛禽類の場合、その巣の詳細な位置を地図上にプロットして公表することはできないので、まずは十勝地方全体をGIS（地理情報システム）で十キロのメッシュに区分して、巣のある位置をそのメッシュで示すことにした。十勝全域で十キロ四方のメッシュ数は151個（うち40メッシュは十勝地方でも）

越冬するオジロワシはオオワシと共に11月から1月にかけて川沿いで越冬するサケ類などの魚類を餌としており、魚を得やすい場所では「ワシのなる木」に複数のオオワシ・オジロワシが鈴なりにになった状態で見られる（写真4）。ワシ類は個体数の減少により保護され、天然記念物の指定で捕獲されなくなったが、鉛中毒、感電、ロードキル、レールキルなどの人為的原因によって死亡する個体がいる。列車事故に遭った個体の消化管からは斃死したエゾシカの肉が検出されることが多く、車との事故でも同様にロードキルのエゾシカの死体に集ま

るワシ類が二次災害に遭う可能性があり、早急な死体の除去などの配慮が必要であろう。また、シマフクロウ、オジロワシ、クマタカなどが道路を低く飛んで横切る可能性のある場所では車より高い位置を飛ぶための防鳥フェンスの設置が行われている。

最後にワシ類の観光資源としての有効活用について述べたいと思う。多くのオジロワシ・オオワシが川沿いで越冬する11月から1月上旬にかけて、十勝川中流部ではワシクルーズというポイントで川を下りながら、ワシ類やタンチョウ、カモ類などの水鳥を観察するツアーを日本野鳥の会十勝支部の協力で定期的に開催している（写真5）。このクルーズではオジロワシ、オオワシそしてタンチョウをほぼ100%の確率で見ることができ、特に海外や本州からの旅行者にも好評である。

以上、いくつか私の研究・活動について紹介した。人と野生動物の共生を考える時、大型の有害鳥獣等が出てはいけない場所に出てこないよう、生息数の管理をしていくことも必要ならばしなければいけないが、一方で増えたタンチョウによる負の効果、「陰」の部分も少しずつ見え始めた。増えたタンチョウが農業害鳥となることは計画の当初から懸念されていたので、2014年9月に農家12軒の聞き取りを行った。そのうちタンチョウによる被害があったのは春小麦の一軒のみで当時はまだそれほど深刻な被害は聞かなかった。しかし、2021年6月に池田町の畑に飛来したタンチョウが空気に銃で撃たれて死亡する事件が起きていた。また、気が強く攻撃的なタンチョウの威嚇に驚き走った牛が骨折し、殺処分となった例もある。今後とも増えたタンチョウの食害問題やその他の影響には注意を払う必要があるであろう。

オジロワシは1970年に天然記念物に指定され、現時点での環境省レッドリスト（第四次）での位置付けは絶滅危惧II類である。北海道のオジロワシには二タイプがあり、一つは一年を通じて北海道に生息し繁殖する留鳥。もう一つは冬にオオワシと共により北方から飛来し、北海道で越冬する冬鳥である。



写真5 十勝川ワシ・クルーズ。(提供/かわたびほっかいどう事務局)

開発局（国土交通省）、北海道そして周辺自治体（帯広・音更・池田・幕別の一市三町）の都市計画公園事業による「自然と人間の共生を目指す公園」を理念に掲げた「十勝エコジョーパーク」（面積約410ha）内に、タンチョウが営巣できるピオトープをつくらうというものであった。また、この地は繁殖だけでなく、越冬にも最適の地であったため、あらかじめそれも念頭に置いて計画が進められた。

順調にその個体数を増やしているタンチョウであるが、そのことによって人とタンチョウの間にいろいろと「光」と「陰」の部分が見えてきた。まずは光の部分から挙げていくと、「タンチョウ十勝移住作戦」は地域に色々な波及効果をもたらした。この作戦はタンチョウのために始めた作戦ではあるが、それだけではなく当初から「タンチョウも（地元の人）人も喜ぶ作戦」を目指していた。

これら取り組みの活動の中心となっている十勝川中流部市民協働会議は、人工湿地の造成による温室効果ガス排出量の削減と生物多様性の増加、アイヌ文化の継承への貢献などの活動が評価され、日本水大賞の環境大臣賞やグリーン

たことにより、越冬地の分散化で個体密集による集団感染リスクの低減が期待できるなど、この取り組みはますます重要な意味を持つものとなってきた。

タンチョウの飛来はアイヌ民族の人々にも多くのものをもたらした。タンチョウはサロルカムイ（湿原の神）と呼ばれ、尊ばれてきた。十勝川中流部で2019年3月にタンチョウの親子が見られるようになった公園を会場として、帯広カムイトウウポポ保存会と平取アイヌ文化保存会による「サロルカムセ（鶴の舞）」が企画された。サロルカムセはその後も継続して行われており、歴史の中で忘れ去られようとしているアイヌ文化の伝承に貢献している。

インフラ大賞の優秀賞などを受賞している。さてここまで良いことばかりを書いてきたが、一方で増えたタンチョウによる負の効果、「陰」の部分も少しずつ見え始めた。増えたタンチョウが農業害鳥となることは計画の当初から懸念されていたので、2014年9月に農家12軒の聞き取りを行った。そのうちタンチョウによる被害があったのは春小麦の一軒のみで当時はまだそれほど深刻な被害は聞かなかった。しかし、2021年6月に池田町の畑に飛来したタンチョウが空気に銃で撃たれて死亡する事件が起きていた。また、気が強く攻撃的なタンチョウの威嚇に驚き走った牛が骨折し、殺処分となった例もある。今後とも増えたタンチョウの食害問題やその他の影響には注意を払う必要があるであろう。

オジロワシは1970年に天然記念物に指定され、現時点での環境省レッドリスト（第四次）での位置付けは絶滅危惧II類である。北海道のオジロワシには二タイプがあり、一つは一年を通じて北海道に生息し繁殖する留鳥。もう一つは冬にオオワシと共により北方から飛来し、北海道で越冬する冬鳥である。

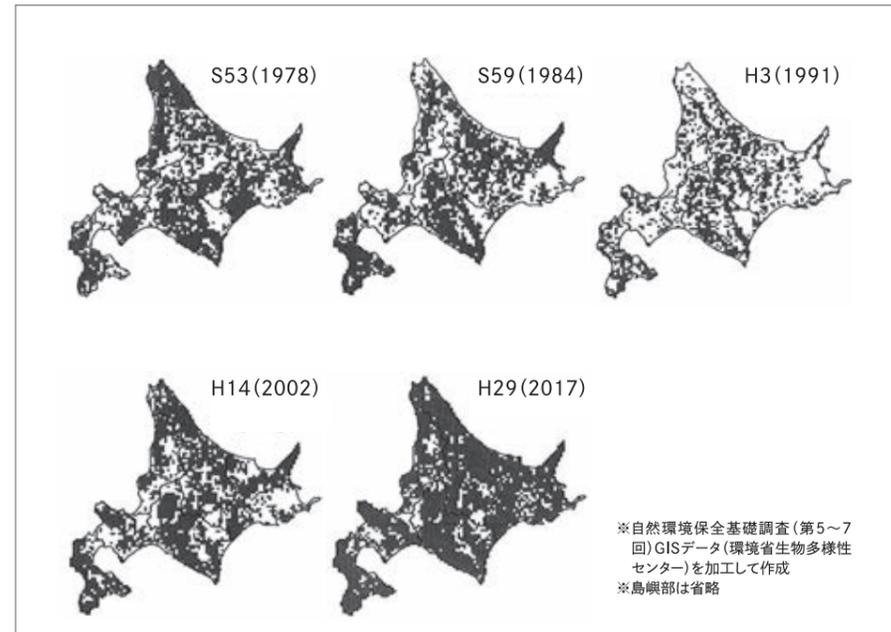


写真3 設置した給餌場に飛来したタンチョウ。(提供/アークコーポレーション(株))

事例紹介 01

ゾーニング管理を強化し、ヒグマと共存できる社会を

北海道環境生活部 自然環境局野生動物対策課 ヒグマ対策室



ヒグマの分布域の推移。春グマ駆除廃止直後の平成3年には分布域が激減し、絶滅が危惧された。北海道ヒグマ管理計画(第2期)改定 別冊資料編参考

北海道の生物多様性を象徴するヒグマ。社会問題化する人とのあつれきを低減し、かつヒグマの絶滅を防ぐため、道では「北海道ヒグマ管理計画」を策定している。人とヒグマが共存できる環境構築に向けて、総合的な施策に取り組んでいる北海道環境生活部野生動物対策課ヒグマ対策室にお話を伺った。

社会問題化するクマ出没 解決の鍵となるのは

まずは道が策定する「北海道ヒグマ管理計画」について教えてください。

橋本 本計画は人とヒグマのあつれきを低減するため、ヒグマとの緊張感のある共存関係の構築を目指して、科学的かつ計画的な保護管理による「ヒグマによる人身被害の



北海道環境生活部 自然環境局野生動物対策課 ヒグマ対策室 主幹(ヒグマ対策) 武田 忠義



北海道環境生活部 自然環境局野生動物対策課 ヒグマ対策室 主幹(計画推進) 橋本 和彦

防止、人里への出没の抑制及び農業被害の軽減」並びに「ヒグマ地域個体群の存続」を図ることを目的としています。過去の調査やモニタリングで蓄積された科学的データをもとに、専門家の意見なども参考に毎年度実施計画を定める順応的管理の考え方をとります。

武田 北海道では昭和41年からヒグマの駆除を積極的に進めるために、捕獲の容易な残雪期の許可捕獲による「春グマ駆除」を開始しました。昭和50年代以降、人身・家畜などの被害は減少しましたが、生息数の顕著な減少につながりました。このままでは絶滅の恐れがあるとして、平成元年度をもって春グマ駆除を廃止し、保護に重心を置いた政策へと転換。その結果、クマの個体数や分布域も回復しましたが、住宅街への出没や人

身事故、農業被害など人とのあつれきがかつてないほど高まっています。あつれきは下げたい、でも、クマは絶滅させない。その両立を図るべく平成29年度に策定されたのが「北海道ヒグマ管理計画(第二種特定鳥獣管理計画)」(現在は第2期/令和4~9年度)です。

橋本 この計画に基づき、道では人がヒグマに対して正しい知識を持ち、適切な行動が取れるようにするための啓発や地域対応力の強化、問題個体(人を恐れずに人家付近などに頻繁に出没する、農作物に被害を与えるなど人間活動に被害を及ぼす、人に積極的につきまとうなどの行動を取る個体)の発生を抑制するための捕獲の実施、各地域個体群の個体数指数を絶滅の恐れが高まる水準以下には下げな

出没した個体の有害性の段階と対応方針の概要

段階	人に対するヒグマの行動	個体区分	対応方針
1	人間を恐れて避ける	非問題個体 市街地 農耕地 森林地帯	経過観察 必要に応じ、関係機関への情報提供、人身被害防止措置*1、農業被害防止措置*2
2	人間を恐れず避けない 人家付近、農地に頻繁に出没する 人間を見ても逃げない 人前にたびたび姿を見せる	市街地 農耕地	必要に応じ、人身被害防止措置*1、農業被害防止措置*2、追い払い等の対策の実施 出没が継続し、地域の生活や産業活動に支障のある場合は排除 対策を講じても出没が継続する場合は排除
		森林地帯	必要に応じ、人身被害防止措置*1及び追い払いの実施 出没が継続し、産業活動(山林作業等)に支障がある場合は排除
3	農作物に被害を与えるなど、人間活動に実害をもたらす 生ごみ・廃棄物等につく 農作物・家畜等を食害、破損した	市街地 農耕地	必要に応じ、人身被害防止措置*1、農業被害防止措置*2、追い払い等の対策の実施 必要に応じ、対象個体の確実な排除
		森林地帯	必要に応じ、人身被害防止措置*1の実施 入林規制措置 必要に応じ、対象個体の確実な排除
4	人身(攻撃、つきまとい等)、生活への影響	市街地	人身被害防止措置*1の実施 地域の実情を踏まえた上で、可能な程度で追い払い等も検討(さらに)出没が繰り返され、地域住民の生命・財産、平穏な日常生活に支障が生じた、もしくは生じる恐れがあると判断した時点で対象個体の確実な排除
		農耕地	人身被害防止措置*1の実施 対象個体の確実な排除
		森林地帯	人身被害防止措置*1の実施 入林規制措置 対象個体の排除 (※レジャー中の偶発的事故など、積極的な攻撃性が認められない場合などはこの限りではない)

*1 人身被害防止措置
 ・見回り ・警察機関への連絡 ・地域住民、事業者、入林者等への周知(情報周知のための看板設置等)
 ・誘引物の除去 ・状況に応じて対策本部等の設置

*2 農業被害防止措置
 ・見回り ・誘引物の除去(農業系廃棄物の撤去、農産物の早期収穫等を含む) ・電気柵の設置
 ・敷地境界の草刈り

いように管理するなど、複合的な取り組みを実施してきました。武田 しかし計画策定以降もあつれきは高まり続け、より深刻な社会問題となっているため、第2期の途中で一部改定しました。各地域でクマ出没が社会問題になっていなかっ

た時期の個体数を「共存水準」として、そこまで個体数を減らさせてあつれきの低減措置を行います。ただし誤解されやすいのですが、単純に個体数を減らすことであつれきが解消されるという訳ではありません。生息地の保全や防除、捕獲などの対策を同時に進める「ゾーニング管理」や、人里周辺の森林に生息する個体を

「個体数管理」を進めることで、人とヒグマとの空間的すみ分けを図るのが改訂の狙いです。ゾーニングの考え方は、市街地や公園、農耕地などはクマを排除するエリア、森林側はクマが生息するコアエリアとし、排除エリアとコアエリアの間に緩衝地帯を作るなどの対策を進めています。

市街地にクマが出没した時の対応は、どのようにして決まりますか？
 武田 ヒグマ出没時の有害性判断フローを基に、「市街地・集落・人家密集地域もしくはその周辺部」「農耕地」「森林地帯」に区分したそれぞれの出没環境と、有害性(問題行動の形態)のレベルによって、

経過観察、追い払い、排除など対応を変えています。市街地に出てきてしまった場合は、問題行動の判断をしている暇はありませんので、緊急対応個体として捕殺します。その他必要に応じ、見回りや警察機関への連絡、地域住民への周知、誘引物の除去などの人身被害防止措置や、電気柵の設置、敷地境界の草刈りなど農業被害防止措置なども行っています。

ヒグマの市街地侵入を防ぐ 社会環境の視点

ヒグマが河川緑地などを通じて都市部に侵入するケースも多く見られます。都市計画や都市インフラにおいてヒグマの市街地侵入を予防・低減できることはありますか。
 武田 市街地に設けられる公園緑地や河川緑地など野生生物の生息空間を確保するための緑の回廊(コリドー)は、生物多様性の保全のために重要です。しかしそこが大型獣の移動経路となっていることも事実です。今後は緑地整備において、場合によってはヒグマやエゾシカの移動経路を

保存するか、遮断するかの計画的な管理が必要だと考えています。大型獣の移動を妨ぎつつ、生態学的回廊の機能を持たせることは工夫次第で可能だと思えます。

その他にも防風林や河畔林があれば、一定の部分で遮断する、クマが身を隠しやすいようなやぶがあれば刈る、河川敷の刈り払いをするなど出来ることはいろいろあります。

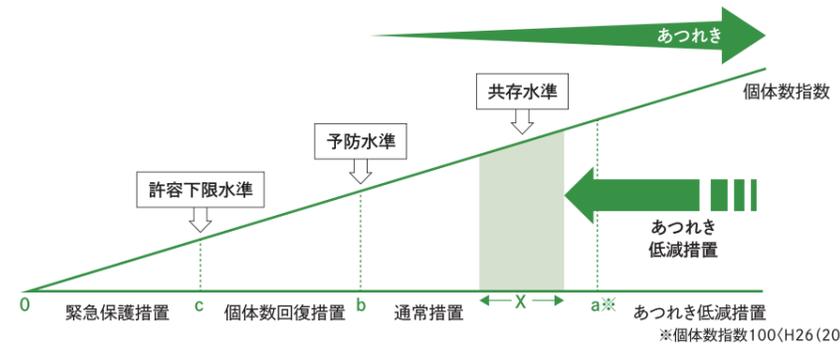


市街地に近づくのを防ぐため、刈り払い活動をする地域住民。



森町三岱のビート畑を始め、保全対策として電気柵を設置している畑も多い。

管理措置と管理水準の関係
現計画の地域個体数群存続のための措置に加え、あつれきを低減させる措置を追加し、個体数管理を行う。



個体数指数	管理措置	捕獲上限数
$X \leq$ 個体数指数	あつれき低減措置	あつれきの指標や生息数の動向を慎重に評価しながら、あつれきの低減を図る必要がある場合は、あつれきが社会問題となっていない場合の個体数水準を目指す
$b \leq$ 個体数指数 <math>< X</math>	通常措置	個体数指数が予防水準を下回らないと考えられる年間捕獲上限数を設定し、総捕獲数をそれ以下に抑制
$c \leq$ 個体数指数 <math>< b</math>	個体数回復措置	個体数の増加が期待できる年間捕獲上限数を設定し、総捕獲数をそれ以下に抑制することで、個体数の回復を図る
個体数指数 <math>< c</math>	緊急保護措置	地域個体群の絶滅を回避するため、狩猟及び許可捕獲を抑制することで、総捕獲数を可能な限り抑制

旭川市では忠別川や石狩川を伝ってクマが侵入してくるので、開発局と協力して河畔林を所々ズバツと切り、そこに電気柵と監視カメラを設置して侵入をモニタリングするという方策をとっていますね。

橋本 札幌市のヒグマ対策の検討会では、ヒグマの専門家だけではなく都市緑化や景観生態学を専門とする研究者にも参加してもらっています。街づくりや土地利用のあり方といった社会環境の視点からも、管理手法の検討を進める必要があります。

— ヒグマと共生する社会を実現するために、どのような課題があるとお考えですか。

武田 大切なのは「正しく知って正しくおそれる」こと。ヒグマの生態を知り、出遭わないための正しい知識を身につけて行動したり、エサになるものを市街地に放置しないなど、人間側の行動が重要です。交通事故で死んだシカの死体を道路脇に放置することもヒグマを呼び寄せます。車や人に慣れたり人間の食べ物を口にってしまったヒグマは繰り返してしまつたように戻り返りし出没するようになるでしょう。農耕地の山際の人の届かない

い場所に作られた飼料用デントコーン畑などもクマにとつてはごちそうです。まずは正しい知識に基づいて対策をしてほしい。道では理解を深めるためのリーフレットの作成や各種イベント開催、楽しくヒグマの生態を学べる「ヒグマ検定」など普及啓発を強化しております。

橋本 また、野生動物管理の専門的知見を有する行政職員や、ヒグマに対応できる捕獲従事者の育成・確保も急務です。道・市町村職員への各種研修や捕獲従事者の実情や課題の把握、担い手育成のためにベテランのハンターさんから研修を受けられるような制度を作ることなども考えているところなんです。クマの場合はいくら技術がすぐくても獲れない場合というのがあります



北海道
北海道環境生活部自然環境局
野生動物対策課 ヒグマ対策室
人とヒグマのより良い共存を目指し保護とあつれきの低減を目的とした、ヒグマ管理計画の推進と自治体との連携、一般市民への啓発と多岐にわたる活動を行っている。

し、逆襲を受けて人身事故になる場合もありますので、ベテランから新たな世代への技術の継承は急がねばなりません。

武田 何より人とクマの空間的住み分けを尊重できる社会になるといいですね。そのためにはゾーニングの実装化や計画的な個体数管理、モニタリングなどを今後も推進していきたいと考えています。

特集3 自然と共生する社会

事例紹介 02

大都市特有の環境の中
札幌独自の対応を目指す
北海道猟友会 札幌支部

環境の変化に伴い
猟友会のあり方も変化

— 北海道猟友会札幌支部の活動内容について教えてください。
会員サービスの組織なので色々な事業を展開しています。安全対策、狩猟技術、道徳の研修会や座学講座などによる会員教育、新人育成に力を入



札幌支部では会員数が増加している中、人材育成にも力を入れている。

れて取り組んでいます。それ以外では駆除関係で行政との橋渡しもあります。「ヒグマ防除隊」に関しては、経験豊富な人材による即応体制の構築から、直接札幌市と札幌支部が契約して活動しています。また、農業被害防止がメインの鳥獣被害対策実施隊という国費の支援がある駆除組織もあり、他の市町村では鹿の駆除活動をしています。札幌では、他の市町村と異なり、JAさっぽろが捕獲許可申請者となって「ボランティア駆除隊」が組織されています。ただ、ここ10年くらい札幌市でも鹿の農業被害が多くなり、実施隊を作る必要があるという話になってきていて、2年前くらいから関係者と話を進めているところなんです。

猟友会に関してお話しすると、我々は親睦団体なので、

法人格もなければ報酬の規定などの設定もない、趣味の集まりです。しかし、ここ15年くらいは公共施設の点検・調査の護衛の受け皿になっていきます。そのため法人格を得ている支部もあります。地域に狩猟免許と銃砲所持許可を持つ団体が猟友会しかなくて、インフラ事業でハンターによる護衛をそこに依頼するしかない状況のため、いつの間にか猟友会の活動がインフラ関係の仕事がメインの組織に変わってしまったという現状があります。市町村の鳥獣被害と公共事業に関係する民間護衛の2つしか実際は活動しておらず、趣味としての狩猟を辞めてしまつていくところが非常に多くなつてきています。

クマ以外の鳥獣駆除では、札幌市は全部ボランティアになり、運搬や処理、処分は一



北海道猟友会 札幌支部
支部長
奥田 邦博

部を除き無償となっています。札幌支部が少し特殊なのですが、クマ以外ボランティアで活動している支部は他にないと思います。鹿に関してはやつと札幌市で集積場を作ってくれたので、そこに持ちこみやすくはなつてきました。今後も行政には働きかけをして、ハンターが活動しやすい環境と一緒に構築していきたいと思っています。

— 自然と共生する社会を目指すために、狩猟者の立場から課題があれば教えてください。

隊ではやっていないような取り組みが必要だと考えています。世界中どこを見ても200万人の都市に、人を襲うこともある動物がいるところはないと思います。我々も出来る事は行政と連携して取り組みますが、この稀な環境に暮らす札幌市民もヒグマに対して正しく理解して、正しく恐れる。どちらも同じ場所です。共生していく為はまだまだ取り組めることはあると思っています。



北海道猟友会 札幌支部
会員相互の親睦をはかり、狩猟知識の普及および狩猟道徳の向上を通じて、狩猟の適正化をはかることを目的として活動している。

Docon Regional Research

[ドーコン リージョナル・リサーチ]



北海道の観光

自然・都市の観光利用と保全

■基調レポート

日高山脈の国立公園化で問われる課題
—原生の貴重な自然を維持・保全するために—
帯広畜産大学 名誉教授 柳川 久

■基調レポート

函館 —その隠された歴史と遺産の数々
東京理科大学 客員教授 三宅 理一

■基調レポート

野生動物と共生する社会を目指して
帯広畜産大学 名誉教授 柳川 久

【取材協力】

北海道日高振興局
アポイ岳ジオパークビジターセンター
環境省 大雪山国立公園管理事務所
環境省 支笏洞爺国立公園管理事務所
環境省 帯広自然保護官事務所
環境省 新ひだか自然保護官事務所
北海道中央バス株式会社(小樽・バイン)
北海道環境生活部
北海道猟友会 札幌支部

その他、多くの方々にご協力頂きました。
この場を借りて御礼申し上げます。

※本原稿は、2023年7月～2024年12月に実施した
視察・取材内容を元に制作しております。

Docon Regional Research ドーコン リージョナル・リサーチ vol.03

企画／発行所 株式会社ドーコン
札幌市厚別区厚別中央1条5丁目4番1号

ホームページ <https://www.docon.jp/>

編集 株式会社ドーコン
事業推進本部 事業・品質管理部
TEL.011-801-1565

発行日 2025年3月26日

©禁無断転載・コピー
本誌掲載の写真・図版・記事などを許可なく無断で転写・転載することを禁じます。

本 社

〒004-8585 札幌市厚別区厚別中央1条5丁目4番1号
代表 TEL(011)801-1500
代表 FAX(011)801-1600

管理本部 TEL(011)801-1501 FAX(011)801-1600
総務部 TEL(011)801-1501 FAX(011)801-1600
秘書室 TEL(011)801-1510 FAX(011)801-1610
人事室 TEL(011)801-1501 FAX(011)801-1600
関連会社企画室 TEL(011)801-1501 FAX(011)801-1600
経理部 TEL(011)801-1504 FAX(011)801-1600

事業推進本部 TEL(011)801-1511 FAX(011)801-1512
事業・品質管理部 TEL(011)801-1565 FAX(011)801-1566
人材開発室 TEL(011)801-1565 FAX(011)801-1566
営業部 TEL(011)801-1511 FAX(011)801-1512
技術情報部 TEL(011)801-1590 FAX(011)801-1591
新産業集積支援室 TEL(011)801-1545 FAX(011)801-1536
インフラマネジメント室 TEL(011)801-1585 FAX(011)801-1541

交通事業本部 TEL(011)801-1517 FAX(011)801-1541
交通部 TEL(011)801-1520 FAX(011)801-1521
都心交通企画室 TEL(011)801-1520 FAX(011)801-1521
構造部 TEL(011)801-1540 FAX(011)801-1541
設計照査室 TEL(011)801-1540 FAX(011)801-1541
防災保全部 TEL(011)801-1576 FAX(011)801-1577
機電情報設備室 TEL(011)801-1576 FAX(011)801-1577
CM室 TEL(011)801-1542 FAX(011)801-1541
北海道新幹線室 TEL(011)801-1527 FAX(011)801-1541

水工事業本部 TEL(011)801-1532 FAX(011)801-1588
河川部 TEL(011)801-1587 FAX(011)801-1588
水工部 TEL(011)801-1530 FAX(011)801-1588
河川環境部 TEL(011)801-1532 FAX(011)801-1588

環境事業本部 TEL(011)801-1572 FAX(011)801-1573
環境保全部 TEL(011)801-1572 FAX(011)801-1573
地質部 TEL(011)801-1570 FAX(011)801-1571
農業部 TEL(011)801-1580 FAX(011)801-1581

都市・地域事業本部 TEL(011)801-1535 FAX(011)801-1536
総合計画部 TEL(011)801-1555 FAX(011)801-1556
都市環境部 TEL(011)801-1535 FAX(011)801-1536
資源・エネルギー企画室 TEL(011)801-1535 FAX(011)801-1536
建築都市部 TEL(011)801-1550 FAX(011)801-1551

支 店

東日本事業本部
東京支店
〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町4番9号
小伝馬町新日本橋ビルディング
営業部 TEL(03)5644-0411 FAX(03)5644-0415
事業部 TEL(03)5644-0412 FAX(03)5644-0415

東北支店
〒980-0811 仙台市青葉区一番町4丁目1番25号
営業部 JRE東二番丁スクエア
事業部 TEL(022)225-2860 FAX(022)264-9331

事 務 所

函館事務所
〒040-0063 函館市若松町15番7号 函館北洋ビル
TEL(0138)27-2613 FAX(0138)26-8269

旭川事務所
〒070-0034 旭川市4条通9丁目1703番地 旭川北洋ビル
TEL(0166)24-5744 FAX(0166)24-7970

釧路事務所
〒085-0015 釧路市北大通10丁目2番地1 新釧路道銀ビル
TEL(0154)22-1891 FAX(0154)22-1491

岩手事務所
〒020-0021 盛岡市中央通3丁目17番7号 北星ビル
TEL(019)656-1206 FAX(019)656-1207

福島事務所
〒960-8034 福島市置賜町1番29号
TEL(024)563-1431 FAX(024)563-1432

横浜事務所
〒244-0801 横浜市戸塚区品濃町535番3号-3001号
TEL(045)308-6930 FAX(045)308-6981

静岡事務所
〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17番地の1
TEL(054)686-5515 FAX(054)273-5578

名古屋事務所
〒460-0003 名古屋市中区錦3丁目1番30号 錦マルエムビル
TEL(052)265-7951 FAX(052)265-7953

ドーコン リージョナル・リサーチは
ホームページでも公開中

Docon
Regional
Research

<https://www.docon.jp/drr>